



幼児教育界をリードする新書判シリーズ!!

フレーベル新書

1 リナはどうやって文字を覚えたか

フレードリヒ・W・フレーベル著

荘司雅子訳

定価 330円

4 楽しい遊び〈室内・園庭編〉

日本児童遊戯研究所編

有木昭久・湯浅清四郎＝著

定価 300円

2 保育者への一つの指針

平井信義・乾 孝・金沢嘉市・城戸幡太郎

八杉龍一＝著

定価 360円

5 楽しい遊び〈伝承遊戯編〉

日本児童遊戯研究所編

有木 久・湯浅清四郎＝著

定価 300円

3 対談・しごとと生きがい

私の出会った15人

多湖 輝

定価 360円

6 楽しい遊び〈園外編〉

日本児童遊戯研究所編

有木昭久・湯浅清四郎＝著

定価 300円

●以下続刊



新しい幼児体育

おはなし体操

石井文子著 A4判 108頁 650円

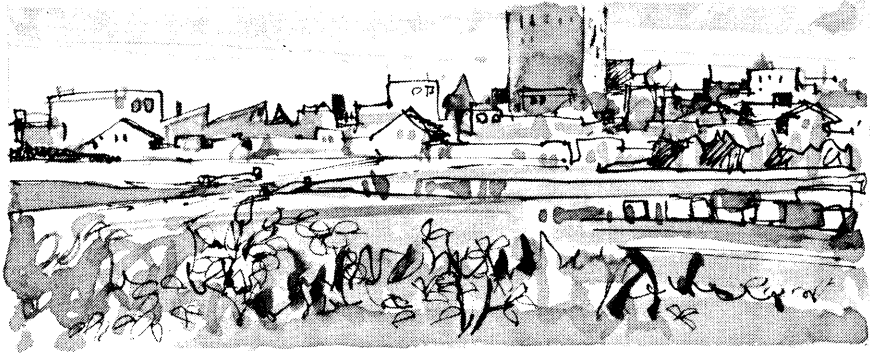
(送料 110円)

おはなし体操は、幼児の動きから生まれた新しい幼児体育の本です。すばらしいお話とそれに密着した軽快なリズムによって、楽しく遊びながら、しらずしらずのうちに幼児の体力づくりができるようにくふうされています。子どももおとなも、共に楽しくお遊びください。

幼児の教育

第七十一卷 第五号





幼 児 の 教 育 目 次

第七十一卷 五月号

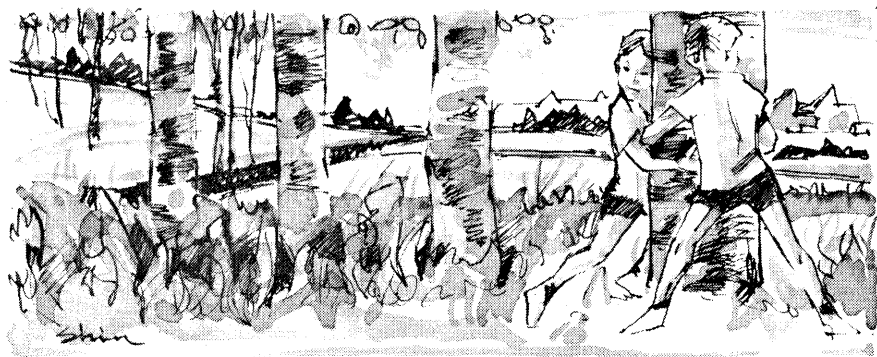
表紙 園 房江
カッタ 斎藤信也

© 日本幼稚園協会
1972

倉橋惣三選集より……………(4)
保育者への提言……………堀内 康人……………(5)

交差保育法の実践・その二……………宮沢キヨ子・大塚朝子
……………佐藤佳代子・相楽幸子
……………指導 大戸美也子……………(9)

私の保育……………本多育枝……………(17)
端午の節句……………黒板伸夫……………(21)



子どものいきがい……………小林慶子…(25)
 遊びの心理学 (一)……………石川信一…(29)

★ユートピア……………十文字良子…(36)
 こどもの紙芝居……………田中都慈子…(38)

幼児の人物画について (二)

—年齢差の表現—……………青木隆…(47)
 ★こんな本・あんな本……………青木秀子…(64)

大正から昭和のお茶の水の幼稚園
 日本幼稚園史の著者、新庄よしこの生きた時代……………赤間峰子
 村石京子…(66)

編集委員・周郷 博・堀合文字
 本田和子・村石京子
 編集主任・津守 真・赤間峰子

うるおい

人はだれでもである。ましてや柔らかな子供は、
友とする我等にとりては、絶えず心のうらおいがなく
てはならぬ。かわいた、かされた、かさかした心は子
供の相手となるに適當のもではない。しかも我等の
心は、またしてもこのうるおいが失せやすい。事務に
忙しいものは、つい粗い機械のようになつて、摩
りへらされた革の様に、日盛りの街を駆けあぐる犬の
その方に熱するものは、日盛りの街を駆けあぐる犬の
咽のよういららしい心になりやすい。まして、犬の
欲にあせるもの焦げた心は、決して子供のよき友で
ない。

(倉橋惣三選集第二卷 幼稚園雑草より)

保育者への提言

堀内 康人

私が園長をしている、ある小さな保育所での出来事でした。私も庭にでて、子どもと遊んでおりました。ふと足洗い場を見ると、水があふれ、その上の鉄格子をひたし、流れだしておりました。私は排水口が詰まったなと思い、重い鉄格子をひっぱりあげるフックをもってきて、それを足洗い場の外に移動し、腕まくりして排水口にひっかかっているくち葉をすくいあげておりました。いつの間にか子どもたちが、私を取りかこんで、排水口から勢いよく流れだす水を興味深そうに眺めていました。くち葉や砂をすくいあげているうちに、たまった水が排水口から流れだし、そのあとに泥や砂、そしてくち葉が残りしました。それまでだまって見ていた子どもたちの一人が、突然叫びました。「園長先生、公害だね」と。最後に水の流れが排水口から落ちてゆく瞬間のことでしたので、私はその一瞬、胸の詰まるような気持で、その子どもの言葉の見事さに圧倒されました。

まわりにいた子どもたちは一斉に「公害だ！ 公害だ！」と騒ぎました。

私はバケツを持ってきて、腰をかがめ、膝をついて、子どもの楽しそうにいう公害を、手ですくいあげながら、子どもたちにきいてみました。「園長先生がこうして、きたない公害をお掃除しなくてもよいようにするにはどうしたらいいの」すると年長の子どもがいました。「砂場の砂をみんながもってきて流すからだよ」と。またある日のこと、私がホールにはいつていくと子ども三人がピアニのうしろでなにかをしていました。私は子どもたちに「さあ！ そんなところでなにしているの、おへやにもどりましょう、先生が待ってますよ」といいますと、子ども一人が、「園長先生は、わかっちゃいねーや」というのです。たしかに子どもという通り、子どもたちがなにしているかわからないままに、「そんなところでなにしているの」とたずねたので、それに対して、子どもはいかにも三

人組で秘密のことをやっているのだといわんばかりの気持だが、その「わかっちゃいねーや」という言葉ににじみでているのでした。

さて、こんな経験は、現場の保育者でしたら、毎日のように、数限りなく経験することでしょう。しかし私どものような大学の研究室にいることのほうが多い者には、全く新鮮な感動に近い経験です。

モンテッソーリは四歳の女の子が、種々の大きさの円柱を木製のはめこみ台に入れる作業を、非常に注意深くやり、全部の円柱をはめこんでしまうと、再びとりだし、同じことを四十回以上も繰返している姿を見て感動しました。そこで彼女は、ピアノの前にすわり、他の子どもたちに歌をうたう誘いをかけても、そのはめこみをやっている女の子は、あたかも自分をとりにまわっているともだちを完全に忘れてもしているように、身動きもしないで作業を続け、そのうちに作業をやめ、目を輝かしニコニコ笑って、さも満足したように立ち上がる子ども、そこに真の安息感と内面的に強められた子どもの姿を見たのでした。

モンテッソーリはこうした子どもたちの姿に感動して、なにを感じとったのでしょうか、それは従来の心理学者たちの数多い学説が、目の前で一挙にくずれ落ちるのを見るような気持ちの中

で、幼児でも長時間注意力を集中できるということでした。彼女は人間はだれでも、仕事に没頭しているときは、完全な孤独、あらゆる事物、あらゆる人間からの完全な隔離を求める内的要求があり、偉大な人間はとくにこうした完全な専心状態をもちうる者であり、そこで子どもたちを早くから物事に集中できる子どもに教育することが大切であることを主張しています。

モンテッソーリの著作などを読んでおきますと、子どもの生活のあらゆる場面で、彼女は実に数多くの新鮮な感動をすると同時に、それをただ感動に終わらせないで、いつも鋭い観察へと掘り下げることが忘れませんでした。ところで観察ということに関して彼女はこうもいっております、「観察をする際には、複雑な装置も特殊技能もいりません、また鋭い解釈能力も不必要です。子どもの心の、手伝いをしようという、心ひそかな覚悟だけで足りるのです」と。

さてここで、次のような図式を書いてみました。

子どもの現実↓感動↓観察↓子どもの心の手伝い↓心ひそかな覚悟

この図式を現場の保育者の問題と関連させて考えてみましょう。最近私はある区立保育園の保母さんから熱心に行っている研究会の研究経過報告資料をいただきました。保母さんの

話では、こうして一年かかってそれぞれのグループで行なった研究経過を苦労してまとめたが、どうも自分たちのグループは研究の進め方がわからなくなってしまうので、指導してくれないかとのことでした。私とその研究資料をみて感じたことですが、よくも忙しい中でこれまでまとめることができたものだ、ということでしたが、全体的にみて、報告資料をまとめる

ければならないということが先にばかりでいて、折角、子どもたちの現実に、興味ある問題、困った問題がたくさんあるにもかかわらず、それがただならべられてあるだけで、たしかに大いに興味があり、全く困った問題として感動的に取上げられていないのです。そこで当然のことながらきわめて平板で常識的に、すぐ心理学者のやりそうな調査統計か教育学者や社会学者がやりそうな社会調査式になってしまっているのです。たとえば乳幼児のおもちゃの研究で、せっかく現場の保育さんが自分たちで工夫して作った玩具、それが子どもたちにもどのようにむかえ入れられ、子どもたちがそのさきをどのように創りだしていったかなどが追求されれば、とめどもなく生き生きと楽しいものに発展するだろうに、それをやらないで、ブランコ・ジャンゲルジムというようなことでまとめられているのです。

感動したら追いかける、追いかけるためにはきよろきよろ、

あちらを見たりこちらを見たりしてはつかまえることはできない、頭を、働かして観察点を徐々にしぼっていかねばならないのです。

次に報告資料を見て気がつくことは、子どもの心の手伝いというポイントがそれで、いつの間にか保育さんたちの研究のまじめに気をとられてしまっているということです。日常の保育をそっちのけにして、子どもには、なんの興味もないようなものを無理に与えられ、それに興味を示すか示さないかなどということを経々とやって、その結果をまとめているのです。これは子どもの心のお手伝いなどということから全くかけはなれてしまいます。モンテッソーリはこんなことをいっています、「教師は、子どもの形成やしつけの上に、いかなる直接的影響をも与えてはならないこと、しかも子どものもっている隠れた力に、全幅の信頼をもつべきで、自分の中にひそんでいるあらゆる虚栄心を沈黙させるよう、忍耐しなければ、決してよい結果を得ることができないでしょう」と。大変参考になる言葉です。

最後に研究報告資料をみて感ずることは、図式の最後の心ひそかな覚悟がそこにできていない、ということでしょう。考えようによってはまとめられた研究報告はあくまで報告であって、一番大切なのは報告が出来る経過で、研究しようとする問

題と子どもとのかかわり合いを大切にしながら、子どもの生活を

を乱さないで問題をひろい上げたり、子どもを観察して行く姿勢ができておれば、しぜんと報告の中にそれがにじみだすことでしょう。たとえば子どもの指しやぶりがやむまでの経過でも通り一ぺんに、最初のころははげしかった、それがだんだんはげしくなくなり、何ヵ月後にはやんだ、というようなことでは、どんな場合でもそうした一般の傾向をたどるにきまっています、そんなことより、子どものそうした習癖をいろいろな方法で試み、努力して直そうという保育者の第一義的な仕事が研究にでてこなければなりません。それには保育者の心ひそかな覚悟のほどが充実していなければならぬと思います。いつの間にか保育者の研究のことになってしまいました。保育者としていつも考えなければならぬことは、子どもは努力しないで、なんの苦勞もなくこのむずかしい日本語を短い期間に身につけるほど素晴らしい存在ですがおとなはなにをやるにも努力しなければならず、苦勞しないではなにごともうまくいきません。そこが本質的にちがう点です。毎日保育者は苦心して保育を計画し実行して行く気概をもち続けなければ、なんの苦勞もなくむずかしいことをどんどんやってのけ、新しい知識を次から次へと、(それが表面的にせよ)おぼえ込んでしまう子どもにおし

まぐられてしまうことでしょう。

四歳の子どもがいつも簡単に「公害」などという言葉を生活の中にもちこみ、おとなにむかって「わかつちやいねーや」という始末です。小学校の先生は、もう八教科を一人で教えることに対して、そんなことはとても無理なことだという問題が大きく取上げられています。幼稚園の先生でもよほど努力しないかぎり六領域の生活を子どもにも楽しく経験させることは不可能でしょう。子どものもより良い保育を旨とす保育者は、今すぐにも自分自身の生活のテンポを切替え、意欲的に勉強を再開しなければならぬと思います。

(東京家政大学)

交差保育法の実践・その二



二 交換保育

1 物の交換を通してきく組とタンポポ組の子どもたちは知り合う。

——十月二十五日（月曜日）のつづき——

ザベリオ幼稚園の大塚先生から預かってきた手紙とクッキー、それにビニールの袋を持って富田幼稚園のタンポポ組の子どもたちは幼稚園の裏の林に向う。なだらかな坂道を十分も歩けば林に出る。林のそばの刈田にはどんぐりの実がたくさんおちている。

「そういえば、きのう先生が手紙をよんだとき、ザベリオではどんぐりが少ないのでとりこしますって、かいてあったわよ」と先生がいうと、子どもたちは、さも意外だといわんばか

宮沢キヨ子・大塚朝子
佐藤佳代子・相楽幸子
指導 大戸 美也子

りに「へえっ！」と大きな声をあげ、次々どんぐりを拾いビニール袋に入れていく。袋に半分近くどんぐりがはいったので「じゃあ、ザベリオのお友だちがきたときになくならないように残しておきましょう」といって、一まずどんぐり拾いをやめ、近くにある別のならの木の林へ移る。その林のわきには野原が広がっているのです、皆こしをおろして、ビスケットを食べることにする。子どもたちは、ビスケットを食べながら大塚先生の手紙をよんでもらう。

大塚先生の手紙

「さとうせんせい おてがみありがとうございます。きくぐみの子どもたちも、うれしいおたよりをなんどもよみかえして、とみたようちえんのかよこせんせいとたんぼぼぐみのおともだちのことをかんでいます。どんぐりやまつぼ

つくりがたくさんおちていることをしつて、おおきなふくろをじゅんびしなくちゃ」と、いつています。やまのなかのひみつのばしょも、あんないしていただけたらもつとびつくりすることでしょう。

ようちえんのまわりはおみせがたくさんならば、どうろはじどうしゃがたくさんとおるのでエンジンのおとがうるさいです。おにわにはかれはがおちています。ともだちはたくさんひろつてきて、きんぎょ、おかし、ロケットをつくつておみせやごっこをしています。そして、ときどきハーモニカもふきます。ちゅうりつぶのきよくをふくのがだいすきです。とみたようちえんのおともだちにもきかせてあげたいです。10がつ29にちに、とみたようちえんへいきたいとおもいます。がごつごうはいかがですか。よいへんじをまっています。では、ごきげんよう。

たんぼぼぐみのみなさんへ

さとう かよこせんせいへ

さくぐみ

おおつか あさこ

子どもたちは、大塚先生の手紙を聞きながら「ビスケットありがとう。おいしかったよってお手紙書こうかな」など口々に

いう。手紙を読みおえるとあせ道があるいて山へ向かう。あせ道の枯草がフワフワしてあんまり気持ちがいいのでそこにすわつて、さく組の友だちの手紙を読むことにする。一人に二、三枚ずつくばり、互いに交換しあつて読む。

「かよこせんせい おたよりありがとう。とみたようちえんのおともだちおげんきですか。ぼくもおげんきです。ぼくはまいにちようちえんごっこをしてあそんでいます。とみたおともだちはなにをしてあそんでいますか。さくま かつゆき」
「かよこせんせい おげんきですか。わたしはすぐにやすんでしまいます。やすんだときに、すぐおせきがかわつて、きてみたらどこにすわるのかわかりません。だからすぐにせんせいにきいてしまいます。だけど、どのくらいしたのしめるんですか。こんどいきますからまっています。10がつ29にちにいきます。えは、わたしがかいています。

さくもり あすか

幼稚園の便せんを使って、こんな内容の手紙と絵や模様、きれいかいてある。

「うわあー、字がじょうずだね」

「この絵おもしろいね」

「いろんな色できれい」

「先生！ 29日ってあと何日？」

名前をよんだり、わからない字を先生に聞いたりして、どの子も一生懸命に読んでいます。「29日にいきます、バスで行きます」とか「どんぐりのある場所をおしえてくださいね」とか、子どもたちが返事の手紙を書きたくなるような文面の手紙をとりあげて、先生は皆によんであげる。

「何てお手紙かこうかな」

「どんぐり みんなあげようよ」

「あら、このはっぱきれいだ。私、このはっぱを使って手紙かこうと」

子どもたちは、山から幼稚園へ帰る途中こんなことを話しながら歩いている。

保育室につくと、子どもたちは改めてきく組の手紙をよみかえしたり、大塚先生の名前を確認したりする。先生は、朝用意しておいたキリン紙を机の所にもってきて「手紙をかきたい人は、ここから紙をとっていいですよ」といい、つづいて黒板に「おおつか あさこせんせい きくぐみ」と大きく書く。子どもたちは全員、紙をとって思い思いに手紙を作り出す。定規で線をひいて使せんを作る子。のりやセロテープを使って封

筒を作る子。山で拾ってきた落葉をセロテープではる子……。

先生は子どもたちの間をまわりながら、わからない字は先生やお友だちにきくこと、お話をしてくれたら先生が手紙をかくこと。絵をかいてもよいこと等を話す。

そして、先生もまた富田幼稚園にはタンポポ組の他に、レンゲ組とスマレ組のあることをきく組に知らせるために手紙を書く。

十月二十六日（火曜日）

富田幼稚園のタンポポ組では、きのう大塚先生に会ってみんなの手紙とどんぐりを渡したことが伝えられる。

「先生、ぼくの手紙やったかい、本当に？」

ザベリオ幼稚園のきく組では、タンポポ組からの手紙が披露される。

合同の集りを終え、子どもたちが保育室にはいつてスマックに着替えている所へ、青い大きな袋をさも目立つように持って先生がはいってくる。

「お手紙がときましたよ！」

「うあーい。とみたようちえんからだー」と子どもたちは歓

声をあげる。

「どんなお手紙かしらね」といいながら、大きなキリン紙で作った便せんやいろいろな形の封筒、あるいは落葉のはりつてある手紙や変わった折り方の手紙をとり出して皆に見せながら、読んでいく。

「おおつか せんせい。びすけっと おいしかったです。わたしのおうちはきれいです。わたしのおともだちは あきです。」

いまいずみ ひろみ

「おおつかせんせい、きくぐみのおともだち おげんきですか。わたしもおげんきです。きくぐみのおともだちはなにをしてあそんでいますか。わたしはかみにはんこをおしてあそんでいます。」

ふじわら ようこ

キリン紙一ぱいに、幼稚園の絵、幼稚園にある青い自動車の絵、ロケットの絵などの描いてある手紙もある。

「へえー、青い自動車もあるの」

「ほんとかなあー」

「うわあ きれいだ。ほんとうのおはなだ」

「おおきな手紙だなあ」

「長い手紙もあるのね」

手紙をきいたり、見たりしながら口々にこんなことをいう。友だちの名前にも興味をもって、何度も反復しながら覚えようとしている子どももいる。手紙をよみ終えると、手紙と一しょにとどいたドングリの実がくぼられる。

「このどんぐりはね、富田幼稚園の林でおともだちが拾ってきたよ」と紹介されると、子どもたちはドングりを大切そうに手の中につつまこむ。

2 物の交換を通してきく組とレンゲ組・スマレ組が知り合う

ザベリオ幼稚園のきく組から手紙とクッキーが届き、富田幼稚園のタンポポ組から手紙とどんぐりが届いて、きく組とタンポポ組はようやく相手を具体的に知ることができた。しかし、富田幼稚園には、他にレンゲ組とスマレ組とがあつて、ザベリオ幼稚園のきく組の子どもたちは、この二組の子どもたちとも知り合いにならない。そしてレンゲ組、スマレ組の子どもたちもまた、ザベリオ幼稚園のきく組の子どもたちとも知り合いにならない。

「きくぐみのみなさんへ」

おてがみたくさんありがとうございます。きょうは どんぐりのみが どこにたくさんおちているか さがしに きました。そして くさのうえにすわって みなさんからのおてがみを見ました。ザベリオには どんぐりがすくないので とりっこします” という おてがみをよんで たんぼぼぐみのおともたちは ひろったどんぐりをみんなビニールのふくろにいれてくれました。なかよくわけてくださいね。もっと いっぱいあるんだけど きくぐみのおともたちがきたときに なくならないようのこしておきました。

とみたようちえんには、たんぼぼぐみのほかに、れんげぐみとすみれぐみがあります。そのおともたちにも みなさんからのおてがみを見せることにしました。

えんちようせんせいやれんげぐみのせんせいやすみれぐみのせんせいとそうでしたら 10がつ29にちにきてもいいですよ、ときまりました。

あたたかくて よいおてんきになるといいですね。

とみたようちえん さとうかよこ

どんぐりをわけてもらったあと、佐藤先生のこんな手紙を読んでもらう。

「どんぐりで何かできないかしら。何かほしいものがあたら、先生あげますよ。どんぐりに穴をあけたい方はあけてあげます。手紙のかきたい方は紙もありますよ」先生がキリン紙、

折り紙、ツマようじ、セロテープ、ホッチキスなど用意したすと、子どもたちはひとりひとり自分の必要とする材料をとって製作や手紙をかきはじめる。タンポポ組の友だちの手紙をみながら、キリン紙に線をひいて便せんを作る子、キリン紙の半分に折り紙で家や模様をおってはりつけ、残り半分にその模様の説明や手紙をかく子、どんぐりに穴をあけて“こけし”を作り紙にはる子、それぞれ工夫をこらして手紙を作っている。作品が出来あがると、先生の用意した大きな紙袋に入れていく。

きく組の子どもたちは、タンポポ組の手紙をみたり、どんぐりの製作を通して、「富田幼稚園へ」「こんど行くんだ」という期待がいっそう高まってきたようである。

同じ日、富田のレンゲ組、スマレ組でもザベリオ幼稚園のきく組の紹介が行なわれる。

レンゲ組では、昨日はじめて子どもたちに生活発表をやってみた。六割ぐらいの子どもが得意気に話し出したが、女兒は恥ずかしくて話さない子どもが多かった。(注1レンゲ組は年長

一年保育組、園児数は18名である。

いつもより早くお集りをよびかけると、子どもは戸惑ったようすで「先生！なにすんの？」「あつ、そうだ、きのうみたいにひとりずつしゃべるんだよ」と口々にいいながら保育室にはいってくる。きのう、何となく話したいふうで恥ずかしがっていた女の子が「きのうみたいにやるの？」とにこにこして先生に話しかける。

「そう、きのうみたいに前に出てお話しできる人いますか？」ほとんどの子どもが手をあげるが、きのう話さなかった子どもにあてる。

「先生もみんなに話したいことあるんだけど話していいかしら？」

「ウン」「先生何したの？」「いいよ」

「先生のお話はこれ」といって、ピアノの上のにせてある大きな紙袋（ザベリオからの手紙）を重そうにかかえて、だまっただま切手やあて名をゆっくり指で示していく。

「あっ！手紙だ。ずい分デッカイナー」

「先生どこからきたの？」

「そう、これは手紙ですね。誰が誰にだしたのかな？ちよつとよんでみるからね」あて名、さし出し人のところをゆっくり、

はつきりした口調で読んでいく。

「知っているよ ザベリオ幼稚園。ともだちそこに行ってるんだよ」

「どうしてザベリオからお便りが来たのか、これからお話ししましょうね」

たんぼぼ組の佐藤先生とザベリオ幼稚園きく組の大塚先生が友だちであること。佐藤先生が大塚先生に手紙を出したら、大塚先生ときく組の友だちから返事がきたこと等を話し、きく組の友だちの手紙を一枚ずつ読んでいく。

「どんぐりのとり合いっこ……」という所で「じゃあ、拾ってやるといいよ」と声がかかる。読み終えると、グルーブごとにその手紙をくばる。どの子どもも、手にとってじつと見入る。字の読めない子どもは、読める子どもにききながら長い時間をかけて一枚の手紙をみている。

今日は雨なので、子どものいつていたどんぐり拾いは出来そうにないので、そのままへやで手紙かきはじまる。ふだん人の絵を描いたこともない男児が、自分を描いている。スモックをきて胸には名札まで付けてある。全員が、絵をかいたり、折り紙をおったり、キリン紙にます目をつけて手紙を書きはじめたりする。小さな袋を作って、自分のどんぐりを入れている子

どももいる。

全員が書きあげたとき、今日中に送ることを子どもたちに約束する。

昼食のとき、先生は「ザベリオのお友だち、富田にくるのがはじめてなんだけど、迷わないでこられるかしら」とひとりごとのようにつぶやくと、

「先生！ 地図かいてやるといいよ」

「あっ！ いいこと考えたわね。じゃあ、大島（注2）から来るといっていたから、大島の道おしえてあげようか。大島のお友だちがかいてくれるといいんだけど。お弁当食べたら地図を作りましょうね」

注2 大島は園の目の先にある部落の名前。幼稚園が小高い所にあるので、田んぼの中の林にかこまれた大島の部落全体が鳥かん図のように見渡せる。

「うん、いいよ」大島から通っている四人の子どもは、皆の前で仕事をまかされたので意気込んで答える。

昼食後、この四人が中心になって大きな模造紙を机いっぱい広げて地図作りがはじまる。先生は、幼稚園と大島のバス停留所（ザベリオの子どもたちはここでおりる）の位置だけを指示し、途中の道すじは子どもたちが考えることになる。いぎ書く

段階になると、毎日歩いている道でもどこでどう曲がるかわからないでいる。そのうち、ひとりかへやの中をぐるぐる歩きながら「こう曲がって、こういって、こう曲がって」とつぶやく。こうして道順が出来あがると次は目印になる建物、状況をかきこむ段階にはいる。四人で考えていると「私、大島知っているよ」と女兒がクレヨンをもって仲間に加わり、橋、川、家などを描きはじめる。地図のまわりでながめていた子どもたちも地図に注文をつけはじめる。

「そうねえ。大島がよくわからないお友だちには、幼稚園を描いてもらおうかな？」先生の呼びかけに三人の女の子が応じ、園舎をかきはじめる。それをみていた男児が「ここにマイク（スピーカーのこと）ついているよ」と描かれた園舎の一部を指で示す。女の子急いでマイクをつける。

「幼稚園のおへやだけじゃなくて、庭のいろんなものをかいたら？」スピーカーを指示した男児は「じゃ、ぼく、外に行ってみてくるから」といって外に出る。外にある遊具を確認してくると、園舎を描いている三人の女の子に報告し、再び外へ出ていく。

「道は細い線じゃわからないから、この色でそめた方がよくわかるみたいね」先生は茶色の絵の具と筆を数本もつてくると、

近くにいた男児一、女児二が新たに加わる。そして、たんねんに塗りはじめた。そのうち外に出ては遊具の位置を報告している男児にさそわれ、外であそんでいた男児も三人加わる。この三人は大島の方をながめ、「田んぼをかいた方がいい」といい出し、さらに竹やぶも地図に描かれていく。ほぼ全員の子どもが地図作りに参加し地図ができあがる。みんなさも満足そうな顔つきである。

お帰りの前に、皆の前に出来あがった地図が広げられ、大島の停留所から幼稚園までの道順をたどってみる。

「きょう、みんなでかいた手紙と地図は、先生がきょう必ず出しておきますからね」

「先生！忘れてだめだよ」

年少児のスマイル組では担任の先生からザベリオの子どもたちの手紙が紹介され、もうすぐザベリオの子どもが富田へ遊びに来ることが知らされる。そして、ザベリオには木の実がないことが話されると、山からとってきてあったマツボックリをザベリオの友だちにあげることになる。

この日の放課後、ザベリオの先生と富田の先生とが出会って手紙や地図、マツボックリが手渡される。そして、子どもたち

の手紙への反応の仕方、製作のときのようすなどが話し合われ、交差保育までに実現しておくことなどが相互に打ち合わされる。

解説

今回は、二園の子ども集団が相互に理解していく過程が描かれている。

保育を交換する場合、交換対象の存在を第一に知らなければならぬ。そして、この事例のように特定の幼稚園のクラスと特定の幼稚園の全体とが交換する場合には、交換対象の幅を双方に広げる必要がでてくる。第一段階では「物」が有効に働く。そして第二段階では、教師のチームが有効に働く。この事例では、手紙やクッキー、どんぐりなどが媒介となったが、物の選択、その生かし方を検討することで多様な交換の方法が考えられよう。また、タンポポ組の先生が媒介となって双方の幼稚園の子どもたちに他集団の存在が知らされ、それを知らされた先生方が発展的に子どもの中にもっていった。チームの組み方、先生の発展的な事態のとらえ方によって、ここにもまた多様な交換の方法が考えられる。

(つづく)

私の保育

—幼稚園の今昔—



本多育枝

幼稚園の先生……「あーやさしい方ね。子どものめんどうみがいい方ね。子どもが好きでなければ……」とよく耳にするが、私もその通り子どもが大好きということで、二十年前にこの道を選らんだ。わが家に「こどもの園」をの夢をいだいて進んではみたが、当時の現実はきびしく、とうとう実現できなかった。

この情熱をどこへもつていこうかと考えた時、誰も希望しない先生不足のところへ出向いてゆき、子どもと共に生活してみたいと思い、親元をはなれ、単身、東京下町の出来たばかりのバラック幼稚園に勤務した。子どもたちは、せまいへやにひしめきあって、エネルギーの発散の場もなく、ある子どもはピアノの上ののったり、窓からとびおりたりの大はしゃぎなので、新卒の私は、いさか面くらってしまった。しかし日が立つにつれて、やりがいのあるところだと思い、やってみようという意欲が心の底からわいてきた。

二年間とうとう口をきかなかったTちゃん。たべものや友だちの好き嫌いがはげしかったIちゃん。何事も消極的存在がはつきりしないSちゃん。おっとりかまえずぐるぐらいのYちゃんなど、子どもたちは、それぞれの持ち味をそのままにして修了して行った。

この間の私の失敗は山ほどあったが、今になってみると一番

なつかしく数々のおもいでがよみがえってくる。その子どもたちから、十六年ぶりに電話がかかってきた。

「これから四人でお邪魔したいと思えますがよろしいでしょうか」びっくり仰天、うれしいやらおどろくやらで胸がドキドキした。

「先生ぼくたちの顔を覚えていますか。ぼくたちは先生の顔は写真をみてきましたから、よくわかります」とのことだった。

四歳の時、五歳の時の顔、そして話しぶりやしぐさなど、あれこれ想像しながら思わずひとりニコニコしながら駅にむかった。あんのじょう子どもたちの方から私をみつけかけよってきた。感激してことばも出なかった。特に背の低い私は、すっかり成長した姿の子どもたちを見上げるようにしながら四人のなかにはいって、しばし無言だった。

初めて幼稚園に勤務した四年間は、ただただ夢中で、ガムシヤラに動きまわったが、とうとう自分の能力の限界をかんじ、スランプにおちいり、いろいろと考えた結果家庭にはいるうか、また、別の道を勉強しようかとも考え退職することにした。幼稚園教育の必要性が全くわからなくなってしまい、考える時間、勉強する時間がほしかった。しかし子どもたちから離れ机上で考えることは、いずれも空理空論に思えたので、おもいきって

専門外の仕事を手がけてみた。そこで得たものは、何よりも「心と心のふれあい、人と人との出会いの大切なこと」「人間の能力には限界がない」という数々のことを学んだ。

限界ができるのは、限界があると思った時である。現在の私たちは、あまりにも「努力」と「実行」という点が、かけているのではないだろうか。

四人の子どもたちは「先生は、まだ幼稚園の先生をしているのですか」「どうして?」「こんなチビ教えていたって無駄ですよ。何もわからないですからねえ!」「教師との出会いの大切な時は、高校時代だと思うけれど」「ぼくが、こんなに話をするようになったのも高校の教師との出会いからだだったなあ」「うん、ぼくも高校のクラブ活動で積極的になった」「Iちゃんは好き嫌いが多かったけれどその後どう?」「全然ありませんよ」きくところによると、友だち関係も実に豊かであること。おっとり型のYちゃんは、昔の面影はなく、やたらに理屈をこねまわしていた。私は思わず「うーん」とうなってしまった。「そうそう、おふくろが、よろしく言っていました」「先生うちのおふくろがね、お前の幼稚園の時はムツリダンマリで、ずいぶん先生を困らせたんだよ」というから、うーし、いまからでもおそくはない。先生にあって、思う存分しゃべってこよう」と思い、無

性にあいたくなつたのです」

「私も母からきかされることは、たいてい幼稚園時代のことなのです。ずいぶん、わがままだったとか……また泣き虫で、先生にだかれ、こぎましょ、こぎましょ、ブランコを、Iちゃんのおうちが、みえるまで……とブランコにのつたことを、よく覚えています」
「ぼくたちが作つたおとし穴に、何回もおちてくれたことが、印象に残っています」
「いつも笑っていたし、歌っていましたね。だけど先生は、こわかつたなあ」
「家へかえりたいと泣く子がいた時、先生もいっしょに泣いていましたよ」
「私身泣き虫なので、泣く子どもの気持ちは胸が痛くなるほどわかつた。」

当時の四歳児と二十歳の私が昔話に花を咲かせている現在が、ふしぎでならなかつたが、こんな私の姿が幼児の目にとまり、いまは、おもいでとなり、語りあう時、やはり幼稚園の先生との出会いも有意義であることが、かんじられうれしく思った。
そのころの私は、ガムシヤラに動きまわつたこと、子どもといっしょに遊びまわつたこと、降園後は地域の中にはいって、おかあさん方と、世間話をしたり、子どもたちの遊具をいっしょに作つたり、思わず知らず時計がまわつて暗くなつた荒川の土手を夢中で走りかえつたことなどが次々と思い出された。

「先生、今に世界の〇〇会社(現在は家内工業)になって、社会科の教科書にのるようになるかもしれないよ。たのしみに待っていてください」この夜はすっかり興奮してねつけれなかつた。

それぞれに味のついた子どもたちの姿を目にうかべながら、現在の幼稚園の子どもたちはどうであろうかと考えてみた。先生がだっこして、のんびりブランコにのれるかしら？ 幼い時から、好むと好まざるとにかかわらず、複雑な味つけをされ、その上「Aちゃんはお〇〇です」とレットルをはらなければ教育効果うんぬん……ねらい達成うんぬん……と逆評価される。レットルは、誰にもはつてはならぬもの、またはれぬものではないだろうか。私は少なからず反発をかんじる。

人はそれぞれに自分にあつた味を、ある時は自らつけながら……またある時は人との出会いによって、相手の味もあじわいながら、自分の味に加え成長して行くものではないだろうか。是非そうであつてほしいと、しみじみ思うこのごろである。

今と昔の幼稚園の先生評とは「やさしい、めんどろみがいい、子ども好き」が今は、ややもすれば親同様過保護の感がないでもない。ということとは、教師自身が周囲の干渉に気がつかつて、おくびようになつていのではないだろうか。昔いわれた、ほ

んとうの「やさしき、めんどうみがよい、子ども好き」とは「心にかけて手にかけてすぎるな」という意味である。

現在私のなげていることは山ほどあるが、机上でうんぬんするより教師自身が実行することだと思う。

まず第一にことばの洪水におしながされないよう行動力を養い、言行の不一致がないよう自分の意志をはっきり表現し人につたえることができることを、しっかり身につけたいとねがっている。

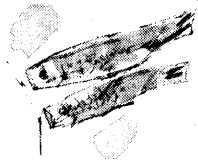
第二に、子どもが最初に会おうのは両親、そして家庭の人々、それから私たち教師であるが、教師の立場からみれば、子どもと会おう前に先生同志の出会いから教育が始まるのではないだろうか。この出会いこそ大切な第一歩であるが、なかなかむずかしい問題がある。教師は常に研究を要求され、また共通理解をもってといわれるが「研究、研究」と何をしようとしているのか。あまりにも子どもを、いじくりまわし、結局は子ども不在の研究結果にならないだろうか。実際に子どもの心や、からだにふれることの方が何よりも大切なことである。

「幼児教育は育児書のようなわけにはいかない。白紙の一ページ一ページにかきこんで行く仕事である」といわれた周郷先生の話を思い出した。

現在の幼稚園は形態にとらわれて、足もとがぐらつき自信をなくしているかんじがしないでもない。その時々に応じて子どもが集中できる形態のなかで、お互いに自然な姿でふれあっていくならば、もっともっと、いきいきとした子どもの姿をみるのが、できるであろう。

この姿の中にこそ、得るもの教えられるものがたくさんある。「元氣、根氣、勇氣」である。どうかこの三本の木が過保護によって阻止されないようにすくすくと育ててほしいものである。

(三鷹市立こじか幼稚園)



端午の節句

黒板伸夫

さわやかなさつき空に泳ぐ「鯉のぼり」。デパートの売場にぎっしりと並んだ「武者人形」。季節感のうすらいだ東京でも、これらの風物が端午（たんご）の節句のきたことを思いおこさせます。

戦後「こどもの日」と定められた端午の節句は、昔から男子の節句として、女の子の三月三日の桃の節句とならんで祝われました。それはまた「武」の節句という性格をもっていました。が、武者人形をかざる風習は、非常に古い起原をもつこの節句の歴史のなかでは案外にあたらしく、せいぜい江戸時代にはいつてからのこと、またこの日のシンボルのような鯉のぼりの歴史もやはりみじかいです。

ここで端午の節句の歴史をふりかえってみるのも無意味ではないでしょう。もちろん長い時代の変遷だけでなく、各地方の

独特の行事、宮廷や民間のちがいはなど、とても限られた紙面や、私のとぼしい知識では、そのごく一端をのべることもできません。

「端午」という言葉については、端とは「はじめ」ということで、もとは月の第一の午（うま）の日に行なわれたものともいい、また最初の「五」の日を意味するので、「端五」が正しいのだともいわれます。また「五」が重なるので、「重五（ちようご）」ともいったそうです。一月一日の元日、三月三日の上巳（じようし）、七月七日の七夕（しちせき）。たなばた祭、九月九日の重陽（ちようよう）。菊の節句）などとともに、奇数月で同数字の重なる日が、古くからの節句として行事が行なわれていたのです。

これらの年中行事はいずれも中国からきたもので、それが日

本の風習と結びついたものですが、この端午も中国では悪鬼や病気をはらう祭であったようです。

日本では古く推古天皇のころから、五月五日「くすりがり」といって、官廷人たちが、狩猟（しゅりょう）の時と同じいでたちで、山野で大がかりに藁草類をとるもよおしがあったことが、日本書紀や万葉集にみえています。そして奈良、平安時代には、朝廷の節会（せちえ）として儀式や宴会などの行事が行なわれるようになりました。

さて、このころからの主役の一つは菖蒲（しょうぶ）です。「あやめ」ともよまれていました。病や邪気をはらうものとして、儀式のときには、朝廷から群臣に菖蒲をたまひ、またどういふ形のものかよくわかりませんが、天皇はじめ参列者が「菖蒲のかずら」を身につけました。

そして菖蒲でかざった輿（こし）をつくったり、屋根にふいたりしました。後世では屋根に菖蒲のほか、蓬（よもぎ）を一緒にふいたこともありました。

また葉玉（くすだま）というものが用いられました。これは彩色した糸でつくり、香りをつけた厄よけの飾りもので、身につけたり、家に飾ったりしたものでしたが、これもはじめの形は、菖蒲や蓬などを中心に、季節の花などを飾り、糸糸で結ん

だものだったようです。中国でこの日に五色の紐を腕にかけ、病をはらった風習と関係があるのでしよう。そして、菖蒲、蓬などは、藁草としての効用から、さらに霊力をもつ草と考えられたのだと思われれます。

なお「くすだま」は、もともとは「葉の玉」ではなく、「不思議な霊力をもつ玉」の意味だったという説もあります。

枕草子や栄花物語など、平安時代の文学には、貴族たちの邸の菖蒲や葉玉の飾りもの、菖蒲を髪にさした女の人たち、歌などよみかわして遊ぶ風景などが美しく描写され、読む人の季節感をそそります。

しかし五月は現在の太陽暦では春のさかりですが、太陰暦（旧暦）では夏ですから、季節感といっても現在とはずいぶんちがいます。そして衛生的でなかった昔では、夏は疫病をおそれなければならぬ時候だったので、この節句に病よけ、厄よけの意味が強かったのでしょう。

菖蒲は飾りもののほか、菖蒲酒など、後世までいろいろな形でこの節句に用いられましたが、その一つの菖蒲湯は、現在でもたてるお宅も多いと思います。

この節会（せちえ）は奈良、平安時代からすでに「武」の行事としての性格ももっていました。さきにのべた「くすりがり」

なども葉草をとる風習と、「武」を練る狩が結びついたものといえるでしょう。五月五日を含めての数日、近衛府（このえふ）、兵衛府（ひようえふ）の武官たちが騎射をきそい合いました。後には近衛府だけになりましたが、これを手結（てつがい）といひます。

このように「武」に関係ある性格からか、この日に民間でも子どもたちの石合戦が行なわれるようになりました。徳川家康が幼時に石合戦をみて、人数のすくない方の勝利を予言したという話は有名です。

江戸時代には石合戦は行なわれなくなりましたが、その名残りでこの日に、作りもののかぶとや刀、旗さし物をもって「いくさごっこ」をする風習となったといわれます。

武家の時代となるにしたがって、この「武」の要素が強くうち出されてくるようになりました。男の子の節句としての性格も強くなり、男の子の生まれたときの初節句はことに祝われませんが、このならわしは今でもかわらないようです。

近世では、旗、のぼり、かぶと、刀などに菖蒲をかざって、家の前に立てる風習も出てきましたが、だんだんに金をかけて手の込んだ作りものや、大きな人形をならべるようになりまし

端午の節句と人形の関係は古く、もとは中国の風習で、蓬の葉などでつくった人形を戸口にかけて厄よけのまじないにしたので、日本でもすでに平安時代に行なわれ、後世まで伝わったことが分かります。

鎌倉時代には紙のかぶとや人形を飾ったりする風習がすでにみられますが、この人形はかぶと人形とよばれ、もともとはかぶとに付けたものだったが、やがて別々になったといわれ、かぶと人形の名はずっと後世まで残ります。

江戸時代の中ごろ以後には、作りもののかぶと、刀（菖蒲かぶと、菖蒲刀とよばれました）、旗、のぼりなどを売り歩いたり、店売りしたようすが多くの書物にみられますが、その中にかぶと人形もあります。そして鯉のぼりもようやく登場しますが、はじめは小さな紙製の吹流しだったようです。今のような立派な鯉のぼりがいつごろからはじまったのか私にはちょっと分かりません。

江戸時代には、かぶと、刀、その他武器の作り物の方が人形より主役だったようですが、これらはかなり立派なものがあつたので、たびたび幕府で出した儉約令の時には、よくやりだまにあげられています。

もう一つこの日に忘れられないものとして「鍾旭」（しょうき）

があります。中国の古い伝説にある鬼神ですが、唐の時代に官吏登用試験に落第して自殺した鍾旭という人物が、その時に帝が同情して手厚く葬った恩義に感じて、帝を守護して邪鬼を退治する鬼神になったということです。中国でも日本でも鍾旭の画像が厄よけに用いられましたが、端午の節句に結びついたのはいつごろかはつきり分かりません。

こうして、いまの端午の節句の形は、ほぼ江戸時代に出来上がったといつてよいでしょう。

端午の節句のたべものとしては、「ちまき」と「柏餅」がありますが、これは「ちまき」が断然古いのです。もともと現在都會で売られているものとは非常にちがひ、また時代によつてうつりかわりがあったようです。

これは、起原はやはり中国で、水中の悪神のたたりをしずめるのに用いたとか、あるいは楚の名臣の屈原という人が、河に身を投じて死んだとき、その霊をなぐさめるための供物にささげたのがはじまりであるなどの伝説があります。

日本でも、すくなくとも平安時代には用いられ、節句の日に人に贈ったりしました。その中には、五色の糸などで飾った「かざりちまき」などもあったことが伊勢物語などに出ています。

「ちまき」の贈答にそえた和歌なども多く残っています。

「ちまき」は古くから行なわれたので、京都の方が中心だったようです。京都には川端道臺という古い由緒のあるちまき屋が今でもあります。

「柏餅」の方は江戸時代になってからのものらしく、小豆餅、味噌餅とも早くから作られたようです。

ある書物によれば、京や大阪では男の子の生まれた初の端午には「ちまき」を配り、二年目からは「柏餅」を配るが、江戸では初年から「柏餅」を配ることが書かれています。

遊びや、たべものに事欠かぬ現代は、いつてみれば年中が節句みたいなものかもしれません。しかもその中の節句はあまりにも商業主義に毒されているように思います。

あまりそれに振りまわされずに、それぞれの節句のもつ歴史的な意味を考えてみるのもよいのではないのでしょうか。

端午の節句にしても、いまに残る行事のはしはしから、容赦ない疫病の猛威の前に、無力な姿をさらしておののいた古代人の、すがりつくような祈りをくみとり、自然に対してあまりにも傲慢になった現代のわれわれの反省としたいように思います。

(吉川弘文館)

子どものいきがい



小林慶子

「生きがい」とは一体何を意味するのだろうか。このためにこそ自分は生きているのだ、生きていてよかった、まさに生きるに値するといった、至極平凡な内容が思い浮かぶかもしれない。しかし、「子どもの生きがい」となると問題はそう簡単ではない。それは「親の生きがい」抜きには論じられない問題ではなからうか。それがこのささやかな小文で主張したいことである。

そもそも、何のために生きるか、生きがいは何であるかをはっきり意識して生活するということは、多少とも物を考える成人の段階で初めて可能なことであろう。子どもにとっては、生きがいは彼らの生きている世界そのものであるといつてよいだろう。彼らの周囲には、無限ともいえる未知の世界がひろがっている。遊び、作り、たずね、知り、驚き、興味のおもむくところすべては、彼らの生きがいとなって未知の世界をどんどん広げていくのである。もし彼らの生活から、その一部たりとも削除したら、彼らの生活は真空状態ともなってしまうのである。おとなが頭の中で考えている生きがいなどというものを、子どもはその全生活をもって生きているのである。彼らにとって生きていること、活動していることが生きがいそのものである。そして、その生き方が年齢と共に変化し、成長していくところが、のびていく者の特権であり、おとなのよるこびでもあるのだ。ここに深く親の生き方がかかわっているのである。

さて、わが家には小学二年の長女、幼稚園年中組の五歳の二女、年少組の四歳の長男がいる。同じ親から生まれ、同じ家庭環境に育ちながら、当然のこととはいえ、

よくもまあこうも個性が違うものかと驚く。

長女は学校の生活を別にすれば、もっぱら読書が生活の中心にあるらしい。小学校低学年向きのものから、小学校中、上級程度の創作童話や、アンデルセン、グリム、さらに世界の民話、伝記などかなり広い範囲にわたって、飽くことない興味をもって読み続けている。彼女は長子なので、幼い時に私が落ちついて相手することが出来たことも幸いして、一歳四ヵ月ごろから、福音館の「ウサコちゃん」シリーズを読んでやり始めた。その後、かなりの数の福音館の絵本のご厄介になり、やがて下の子どもたちも一しょに聞くという習慣ができていった。長女は次第に絵本を卒業して、小学校入学と共に岩波おはなしの本などの民話の世界にはいつていった。私は毎晩子どもに本を読んでやりながら、彼らと共通の世界を楽しむむという喜びを深く味わったのである。下の二人には、長女が、自分が前に読んでもらった絵本を読んで聞かせるようにもなった。彼女は一応読んでもらったものを、次は自分一人でくりかえし読み、自分の前に未知の世界がどんどん開けていくのに胸をおどらせ、喜びを味わっているのである。「風につてきたメアリー・ポピンズ」

などのあのメアリー・ポピンズ物語は、終始彼女の興味をとらえて離さなかった。あの時の目の輝き、また自分で読んで内容を話しに来る時の表情、弟妹たちとジェインやマイケルになって劇遊びをする時の楽しそうなようす、これらを見るにつけ、なるほど本を読むよろこびが、この子の生きが이었다のだとしみじみ思ったことである。と同時に、親が子どもとこの世界を共にして喜びをわかち合うことが、どんなに大切なことかということをも痛感するのである。

時につまらぬ本も借りてきたり、マンガを読んだり、昨今のいい加減な学習雑誌の類も、借りて読んでいるようである。しかし、これらを気にすることもなければ、制限する必要もない。それらは一旦彼女が知った本物の読書のよろこび、ベールが一枚とれるように、目の前に開けていく新しい世界の新鮮な魅力に遠く及ばぬことを自ら悟るであろう。ある時は世界を共にし、ある時は親が自信をもって子どもたちに新しい世界を示し、どうでもよいものは「ただ見て過ぎる」ことを学ばせるのは、読書の世界のみのことではない。かくの如くして、長女は目下、シュリーマンのことを書いたヴィーゼの「夢を

掘りあてた人」を毎夜私と共に楽しんでる次第である。

二女は長女の同年齢時に比べて、本への興味はさほどではないが、目にはいるもの、手にとるものごとく物が創る対象らしい。あき箱でござれ、包み紙でござれ、彼女の手にかかると、まがりなりにもたちまち彼女の頭の中で考えているものに形作られていく。また時に、ひとりで長い時間絵を描いたりしている。この子は視覚と手を動かすことによって自分の世界を創造し、それを広げていくのである。両親のどちらにもない要素をもったこの子が、精一ぱい生きられる方向を我々は示してやらなければならぬ。ここでもまた、親の自信をもった生き方が不可欠なこととなるのである。

四歳の長男にいたっては、犬コロのように一日中、からだ全体を動かして遊びほうけている。庭に穴を掘り、泥をこねまわし、近所の子どもたちと取組み合い、走り回るといふ毎日である。そして当世のご多分にもれず、仮面ライダー、スペクトルマン等の一連の怪獣にのぼせ上がって、ドタンボタンやっている。彼の頭の中には、朝起きてから夜寝るまで仮面ライダーの他はないようである。それは文字通り彼の生きがいである。まことに子

どもの生きがいとは、子どもの興味の対象であり、好奇心の対象でもある。だからこそ、彼らの生きている世界そのものだともいえるのである。この興味という一つの心理的態度が、実は彼らの成長の重要な原動力の一つになっているのである。この興味をどの方向に向け、どう成長させていくか、再び問題は親の生き方にかかわってくる。

いかに私はテレビが気に入らぬからといって、かくも子どもを夢中にさせている怪獣番組を禁止する人はいないであろう。(もっとも私とて、あのあくどい商業主義の番組に百パーセント賛成しているという意味ではありません。念のため) テレビで見ただけでは満足せず、適当にコスチュームをつけ、奇声を発してあの真似をして遊ぶのだからかなわない。わが家でも上と下の二人が毎日飽きもせず、「ライダー・キック」などと叫んでドタンボタンやるのを見せられると、親たるものまったく嘆かざるを得なくなる。しかし、これも辛いが浮世のおつき合いと単純に諦めるか、さりとてテレビ禁止とはいかぬ。

事はマンガやつまらぬ本の場合と同様である。子どもは、良い本の世界を知っていながらも、なおかつ、マン

が読みたいのである。それがつまらぬものとわかっていくように、テレビも次第に「見て過ぎる」段階に達するのを待つのである。それには、怪獣番組などに対する子どもたちの気持ちの動きを十分に読みとることが何より大切であろう。また、子どもたちと同じ世界に心を遊ばせてみるのが、別の新しい世界を開いてやるために必要なことではなからうか。かくて、目下私は彼らと共に、いろいろな怪獣とおつき合ひしており、彼らと次回ライダーの運命や如何にと手に汗握ってハラハラしているという次第なのである。子どもの生きがいともいふべき世界を共有しているというお互いの信頼感、それが精神生活をよりよい方向に向かわせ、次の段階に発展するための不可欠の条件ではなからうか。

マンガも怪獣も、子どもたちを生き生きさせ、彼らの生活を盛り上げていくかぎり、一つの段階として十分意味のあるものであろう。しかし、やがてそれらは本当の読書の魅力なり、彼らを内から力づけていく本物にとつて代わられるべきものである。子どもの生きがいたる彼らの生きる世界、興味の対象に、いかにして本物を示し、その成長を助け、子どもの生きがいをして真の「生きが

い」たらしめるものは、親の生き方そのものである。親が何を生きがいとして生きるかが問われているのである。世上、親の権威の失墜はなだしいと喧伝されること久しい。それでは子どもの生きがいも何もあったものではなからう。子どもの自主性尊重という殺し文句が、親の責任逃れのいい訳になってはいないだろうか。今、自分の世界で精一ぱい生きていく子どもたちに、親も自分たちと同じ世界を共有していくという信頼感と安心感をいだけさせて、彼らに高く新しい世界を開いてやる責任を、自信をもって果たさなければならぬのではなからうか。「汝ら若き日に汝の創造主を憶えよ」という言葉が、私にとっては三人の子どもたちの生きがいを真の「生きがい」たらしめるよりどころであり、心の最も深い所での祈りなのである。

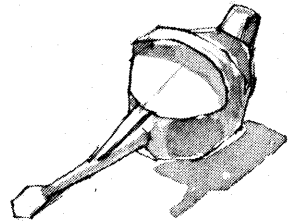
遊びの心理学 (一)

遊びの心理学というテーマを与えられたが、ここでは主として幼児の遊びに関する最近の心理学的研究成果のいくつかをとりあげて述べ、それらと幼児の教育との関連について考えてみたい。

遊びと周期性

遊びが自由で自発的な、そして喜びや楽しみの源となる活動であることは、遊びの根本的な特徴の一つとしてくり返し説かれてきたところである。しかも、それは子どもたちのよく知っている環境の中で、なじみの遊具や材料が自由に使えるときに生ずる活動でもある。

石川 信一



それでは、このような環境の中で、そのような遊びの対象物と交わりながら幼児が遊んでいるとき、その遊び行動はどのような経過を示すであろうか。そこでは、他の場面においては見られない特質が子どもたちの行動を貫いている、ということはないであろうか。

この問いかけに対して、少なくともひとり遊びにおいては、「周期性」という特質が、と答えたのが、ドイツの心理学者トローメと彼の共同研究者たちの一連の研究（一九五六）である。トローメらは、一歳から七歳までの幼児七〇名について、彼らが家庭あるいは施設（一―四歳児）および幼稚園（四―七歳児）において、前述のような条件のもとでひとり遊びをしていると

きの行動（二〇名の幼稚園児については、集団の中で遊んでい
るときの行動）を、一人の子どもについて合計二時間ないし二
時間半観察した。行動の経過は、すぐ次にあげる事項が記録か
ら読みとられるようにできるだけ綿密に記述され、また同時に
一分間隔で時間の経過を記録していった。そして、このように
して得られた記録は、

(一) 遊びのさいの活動と運動（すわる、立ち上がる、走るなど）
(二) 遊びに使われた遊具

(三) 遊んだ場所

(四) 遊びの行動型（遊具に熱中して取り組む静的な行動と、主
として運動的な行動ないし遊具や興味あるいは活動をすぐ変
える「活発な」行動）

という四つの観点を浮き立たせるように簡約して記述しなお
された。

結果は、とくにひとり遊びの行動において、これら四つの観
点のそれぞれに周期的な交替の現象が見られることをはっきり
と示したのである。すなわち、子どもたちの行動の中に「同じ
活動単位が、二回ないし数回[反復して現われ]（活動の周期性）
」「さまざまな遊具が、二回ないし数回同じ順序でくり返し用い
られ」（遊具の周期性）、子どもたちは、「へやの中のいろいろな

場所で、二回ないし数回同じ順序でくり返し遊び」（場所の周期
性）そして「運動的な遊びと遊具での遊びは二回ないし数回交
互に現われ、しかもそれぞれの遊びをする時間はほぼ等しい」
（行動型の周期性）ことが確認されたのである。そこで次に、
各形式の周期性の実例を、四―七歳児の記録から選んで述べて
みよう。

(一) 「活動の周期性」の実例

八・四五 彼女はもっている鎖を空中で振り回す―それから
それを延ばす―もう一度それを空中で振り回す―
それに指を通す―またそれを延ばす。

八・四六 またそれを空中で振り回す―それに指を通す……

(二) 「遊具の周期性」の実例

八・四一 彼女がへやにはいつてくる―わくつき馬車に手を
かける―それを自分のうしろに引き寄せる―それ
をほっておく―机のところに行く―家のおもちゃ
の箱にちよっと手をつっこむ―またわくつき馬車
に手をかける―それを自分のうしろに引き寄せる
―またそれをほっておく―机のところに行く―そ

こで家のおもちゃの箱の中をかきまわす―それからわくつき馬車にもう一度手をかける―へやの中を引き回す。

八・四六 また机のところに行く―そのままそこにいる―家のおもちゃの箱を開けはじめる―机の上に家を並べる……

(三) 「場所の周期性」の実例

○・三八 人形をまた車の中に戻す―窓ぎわの腰かけから走り去る―へやの中を走る―また窓ぎわへ行く―ドアのところへ行く―また窓ぎわへ―またドアのところへ―また窓ぎわへ―

○・四二 立ちどまったままでいる―人形を車から取り出す。

(四) 「行動型の周期性」の実例

九・二九 人形をのせたわくつき馬車をへや中引き回す―隣室へ走って行く―またはいってくる―人形と車をいじりまわす、など。(六分間の活発な活動)

九・三五 絵本を見たいようすを示す。(二分間の静的な活動)

九・三七 絵本を開く―また隣室へ走って行く―また戻って

くる―絵を書こうとするが、絵本にも目を向ける―窓ぎわに走って行く―机に走ってくる―そして決心がつかないまま机のあちこちに立ってみる―また窓ぎわに走って行く―私のところへくる、など。(六分間の活発な活動)

もちろん、各形式の周期性が現われる頻度は一様ではなく、またそれぞれに個人差や年齢差が見られるが、一般的には、年少幼児ほど周期性が強く現われる。たとえば、レーアが分担観察した一―二歳児では、平均して全観察時間の四〇・九パーセント、すなわち一〇〇分のうち四〇・九分に「活動の周期性」が見られたのに対して、シャープピッツが分担観察した四―七歳児では、平均七・一パーセント(個別観察)と四・四パーセント(集団観察)にすぎなかった。しかし、年長幼児においては、年少幼児には見られない特殊な形式の周期的活動の現象、いわば「活動の周期性」のヴァリエーションがいくつか認められた。また、「遊具の周期性」の割合は、一―二歳児では平均五一・三パーセント、つまり遊具の一〇〇回の使用のうち五一回は周期的に使用されたのに対して、彼らが示した「遊具の周期性」とは異質のそれが見いだされた四―七歳児では、六四・六パー

セントに達した。

さらに、年長幼児では、「場所の周期性」は「遊具（ないし興味）の周期性」と組み合わされていることが明らかにされた。

最後に、「行動型の周期性」は、一―二歳児では「運動的遊び」と「遊具での遊び」の周期的な交替としてとらえられ、平均して一時間あたり一〇回の交替が生じたのに対して、四―七歳児では、それは「遊具と熱中して取り組む活動」と「活発な活動」の周期的な交替として起り（観察場面の空間的な狭さと関連している）、平均して一時間につき五回であった。しかも、交替が生ずる時間間隔は、それがほぼ等しい間隔で生ずる一―

二歳児のばあいとは異なる形式を示した（実例参照）。

また、一―二歳児を観察したレーアは、このような周期性ないしリズムの現われを妨げる要因として、

- (一) 同時に与えられる遊具が少なすぎるか、多すぎる
- (二) 運動空間が狭すぎる
- (三) おとなの干渉が多い
- (四) 子どもの気分が不快な状態にある

なお、集団の中での遊びのさいには、このような周期性はごくわずかしか認められなかった。ちなみに、古川ら（一九六八）

が幼稚園児の集団での自由な遊び活動を観察した研究において、「定期的反復型」とよんでいる行動類型は、トーマラのいう「活動ないし行動の周期性」と同じ現象を認め、これを類型化したものと思われる。

それでは、トーマらは、これらの成果をどのように解釈しようとするのであろうか。トーマは、生活体の内的過程によって決定される行動には周期性ないしリズムがあるのに反して、外的な環境刺激によって決定される行動は、非周期的かつ散発的である、という仮説を立て、自分たちの観察結果はこれを実証したものと解釈する。

すなわち、彼によれば、遊びの全体を合成している子どもたちの個々の動作とか行為は、不規則に、全く偶発的に、また全く外的な場の力に基づいて継起するのではなく、同じようなことをほぼ等しい間隔で活動させる内部法則に基づいて継起していくところが「大」なのである。いいかえれば、遊び行動は、それが周期的な形式をとって現われるかぎりでは、外的な誘因、すなわち遊具や遊びの場所の条件によって支配されるところよりも、いわば波打ちぎわの波動のように経過する内的な「推進力」によって決定されるところが大きいのである。そして、子どもの行動が鼓舞や命令ないし禁止によって干渉されない「自

由な」遊び場面が、このような周期性を成り立たせる前提である。したがって、集団の中での遊び行動においては、周期性の力学に集団成員の相互規制のような社会心理学的要因が層を成して重なってくるので、周期的交替の現象はそれだけ少なくなる。

さて、トーマはさらに、みずからの定式は発達の諸現象についても適用されることを主張する。すなわち、彼によれば、周期の長短にかかわらず、周期性の形式をとって現われる発達上の現象は、内因的に規定されており、散発的ないし反応的に現われる現象は、外因的に規定されているところが相対的に大きいのである。発達が「波動の形をとって」あるいは「律動的な交替のうち」に、「ら線的に」経過する側面をもつことは、すでにゲゼルやブーゼマンなどの発達心理学者によって強調されてきたところである。しかし、トーマはここで、人間の発達の原理には、自己調節の原理に基づくこのような周期性とともに、いわば外因的調節の原理としての社会化が加わることを指摘する。そして、彼によれば、周期的な自己調節作用と各種の形式の非周期的な調節作用が、行動の中でどのように関与しているかを、彼らが行なったような行為の構造の精密分析を通して追跡することが、新しい形式の発達心理学をつくりだすことにな

る。ちなみに、彼らはその具体的な成果の一つとして、四一六歳児の行動とその経過の形態には、根本的な構造変化が示されることをあげている。

ところで、トーマらのこのような発見とその解釈は、幼児の教育にとってどのような意義をもつであろうか。幼児の教育は、彼らの遊びを中心に、営まれねばならない、というフレール以来の主張には、遊びが、自由に、自発的に、熱中して、楽しく、しかも創造的に取り組まれる活動であり、そのような活動としての遊びこそが、この時期の子どもの心身の諸能力をもつともよく発達させる、という洞察がその根底にあった。そしていま、この洞察には、幼児の心身の諸能力は、つねに彼らの遊び活動のさまざまな可能性の間の律動的な交替の中で発展してゆく、というトーマらの洞察がつけ加えられねばならない。幼児の遊び活動の発展は何よりもまず、「ら線のモデル」にもっともよく従うのである。

このようにして、みずからのもつ要求を満たしている遊びにおいては、子ども自身が遊びの対象物を自由に選ぶことができ、またそれらとかわり合う仕方においても、選択の自由が許されていなければならない。その上、いくつかの活動の周期的な交替を妨げることのない「遊びの空間」が、あらかじめ用意さ

れている必要がある。この意味において、園内には、そこでの遊びを禁止している場所や設備のないことが望まれるし、あるとしても最小限にとどめるべきなのである。さらに、そのような「遊びの空間」には、それぞれの子ども固有の活動のリズムに相応した遊びができる、「遊びの低位空間」がいくつも構成されていることが要求される。

園の中には、仕切りのあるコーナー、植え込み、坂道などのような変化に富んだ遊びの場所が用意されていないなければならない。そしてまた、子どもたちの活動の固有のリズムを妨害し、かく乱しないためには、このような「遊びの空間」とともに、十分な「遊びの時間」も用意されている必要があるし、子どもたちの遊びを突然に打ち切ることも避けなければならない。

さらに、津守（一九七〇）が、「幼稚園の生活は、全体としては集団であるが、その中では個人の生活が十分できるようになっていないなければならない。まわりで他の子どもたちが他のことをしている、一人で自分の作りたいものを作るようになっていくことがたいせつである」がゆえに、「子どもがひとりで行える空間と時間が必要である」ことを説くとき、われわれはトーマらとともに、遊びそのものが本来、そのような要求をみずからのうちにもっていることを強調しなければならない。

また、リーバーマン（一九六五）が充実した遊びをしている幼児の特徴の一つとして、遊びの時間の間に、その子どもがいろいろなグループに加わり、それぞれのグループの一員として遊び活動をする、そして自分自身の選択によって、あるいはグループの成員の側からの悪意のない示唆によって、グループに出入りすることのできることをあげている。彼女のこの指摘が正しく得たものであることは、容易に理解できるであろう。トーマに従えば、集団の中での遊びにおいても、ひとりひとりの子どもが、みずからの固有のリズムに従って活動できることが、遊びのもつ要求にかなうことになるからである。さらに、レーアが指摘したように、遊びの周期性ないしリズムは、遊具や材料の過少や過多によって、また運動の制限によって妨げられるとすれば、それらの最適な量や最適な運動空間の広さが、あらためて問われなければならないであろう。これに加えて、トーマ自身も強調するように、幼稚園や保育園の遊びの教育にとっては、保育者によって組織される遊びの時間と自由な遊びの時間を量の上で有効に調和させることだけではなく、いつ、子どもあるいは子どもたちが、外部からの刺激を必要としているのか、もう一度彼らの自己活動に、任せることのできるのはいつなのか、あるいはいつ任せるべきなのか、というその

時点を察知することも必須の要件でなければならない。

最後にわれわれは、トーマらのこの成果をとおして、保育者の「教育的な指導が遊びを損うことなしにつねに可能である」とすれば、それは保育者が遊びの要求のうしろに身をおくばあいだけである」(シヨイール、一九五四)ことを強調しておきたい。

(弘前大学教育学部)

引用文献

- Lieberman, J. N. 1965. Playfulness and divergent thinking. *J. genet. Psychol.*, 107:219-224.
- Scheuerl, H. 1954. *Das Spiel*. Beltz.
- Thomae, H. (Hrsg.) 1956. Untersuchungen über die Periodik im kindlichen Verhalten. *Z. f. exp. u. angew. Psychol.*, 3:1-43, 179-217, 331-380, 575-601.

古川敬子ほか 一九六八

『幼児の遊び活動に関する一研究』 保育学年報一九六八年

版 フレーベル館 一二—一三ページ

津守 真 一九七〇

『集団への適応とはなにか』 幼児の教育 六九卷 五号

二—五ページ

ユートピア

子良文字十

私は東京で生まれましたが、四歳番（のかぞえ方）の時に、祖父母がさびしからといって郷里の福島へ連れて行かれ、そこで、今でいうと幼稚園の年長組にはいる年まで育ちました。わずか三年の間でしたが一生心に残る思い出です。

祖母は家つき娘で体の大きな、子ども

も心にも無骨な人であったと覚えています。祖父はそれにひきかえ、色が白く、スラリとしてなかなかの美男子でありました。むことというと普通はおとなしいものようですが、この祖父は大変きむずかしく、わがままものであったということです。それで子どもが全部とついでり東京へ勉強にいつてしまつたあとは、やはり気の強い祖母とはあまりしっくりいかなくて、その中和剤として私がやられたものようです。私は祖母の縫い物をしている姿を見たこともありません。私を東京へ帰してからは八十五歳でなくなるまで一年に一度は必ず上京してきましたが、その時はいつでも「ダディロングレットス」とか「イノックアーデン」などの英書を持ってきていました。きかないだけあってなかなかのしっかり者でした。

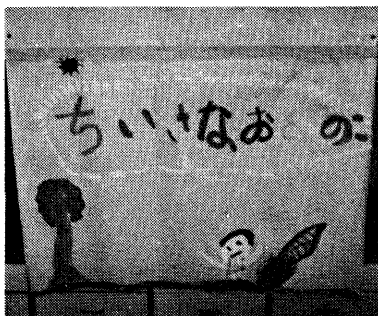
五人の男の子の全部を東京の大学を出し、四人の娘をそれぞれつがせ、今ではその孫、ひこ、やしやご、その連れあいまで合めると二八〇名にもなつて、一年に一度、親族会を開くと実に壯観です。現在でもふえつつあるのですから、今年の干支のネズミと子孫繁昌くらべが優に出来る数字です。そういう祖母ですから、日ごろは料理とかで馳走らしいものなどはめつたにありませんでしたが、雛の節句の時だけは別でした。昔、ご領主さまにご用金を用立てすると「過分に思うぞ」と手近のお品を下さつてそれで殿さまの借金はパー。何十両の代りに、香箱だの火鉢だのが残るしかけになっていました。そのようなことで、お雛膳も、殿さまの紋入りのかわいいいのがいくつありました。それでびっくりするようなど馳走をして私のともだちを招いて

くれるのでした。お雛さまのご馳走というの、たいがいきまっています。が、雛という字のもっている「小さい」とか「かわいらしい」とかの意味のおとりで、かまぼこも紅や草色のひなまぼこという小さな板付を何日もかけて京都からおくらせて、玉子焼もこれに合わせてかわいらしく巻き上げ、小袖形に切ってありました。阿武隈川の鮭とすじこの紅葉漬も必ずついていました。が、それは祖父の酒のさかなであつて子どもの口には合わなくとも、その色どりは雛の膳にふさわしく、四月三日のこととて、よもぎも、つくしも、膳に供せられるのでした。この思い出は今でも私の心にしみついてはなれないのです。きつと親元をはなれ、はるばるきている幼い孫娘をふびんがった祖母の精一ばいの心づくしであったのでしょう。

この祖母が庭の花では色を、落葉をひろつては数を、東京へ送るお餅では量を、そして勝手の大きなふり子時計では時間を教えてくれました。そのころの田舎の遊びは限らないものでした。山のむこうに夕日がかがやき、寺の鐘がなりひびき、からすがねぐらへいそぐころ、「早く帰らんしょ、天狗さまに誘われっから」とまだ遊びに夢中になっている子どもに迎えの声がかかる。と子どもらは、本当に天狗さまがさらいにくるような気がして、一目散にあかりのついたわが家へ走るのでした。

水車小屋の一人者の源爺さんはそのところろに大きなこぶがたれ下がついていたので、いつ山へいって赤鬼か青鬼にこぶを取ってもらうのかしらと思っていました。お盆に仏さまにあげたご馳走やなすの馬を、里いもの葉っぱに包んで川に流す時は、川にいろかっぱにどうぞおしりをぬかぬよう今年もよろしくと、あいさつをするのでした。あのころの子どもたちの生活には、天狗さまもゆうれいも一つ目小僧も、子どもたちの世界の片すみにあつて育っていたのです。明るいきけいこう灯と、にぎやかなテレビで育つ現代の子どもには、そういう世界があるでしょうか。今の子どもは、テレビやマスコミなどで豊富に知識をもっているのです、かぐや姫だの、天狗はおかしくて、いくら「昔のおはなしよ」といってもなかなかのつてきませんし、怪獣でさえも、次々に征服され、ボールや運動靴のマークとして酷使されるようになっていきます。必ずしも昔がよいというのではありませんが、あまりに、合理的、実証的になりすぎてしまつて子どもたちの夢をふくらませることができなくなつてしまつたことを、悲しく残念に思います。

こどもたちの紙芝居



田中都慈子

こどもたちは、あの小さなからだのどこにあの活動力を秘めているのだろうか。おとなたちは、自分たちがこどもだった時があったことをしばしば忘れ、無理な注文をしたり、大事なことをとり落としていることがある。

今、三歳、四歳、五歳と受けもち、考えることは、今までこどもたちが経験し、体験してきたことが、ほんのささいなことであってもこどもたちの成長に大事なことだったということである。最近の活動を例にとってみよう。それは、こどもたちが話をつくり、それが絵本となって、それをもとに紙芝居をつかって誕生会に演じたことである。

経過

十月二十二日 十名（うち女兒三名）が、少しずつ話を続けて「小さな男の子」という話をつくった。（42ページ参照）降園時にクラス全体にその話をきかせ、楽しむ。

十一月二日 絵本にしようという意見がでる。

十一月十六日 Mが紙を切って本の大きさを決める。（16.5 cm × 11.5

cm 13ページ）教師が字をかき、数人のこどもたちが集まり自分のかきたいページの絵を色鉛筆でかき、一冊に仕上げている。絵をかかなかったこどもでもでき上がった絵本をみる。

十月二十二日 十一名のこどもが「小さな小さなおも」の話を つくる。

十一月十八日 九名のこどもが「大きな男の子と大きな女の子」をつくる。

順次、絵本になる。

しばらくの間、その三冊の絵本は、こどもたちの間でぐるぐると回され、読んだり見たりして楽しむ。

十一月のお誕生会にぜひその話をききたいということがもち上がり、紙芝居にしてみせることになる。そこでこどもたちと相談をした。

十一月十八日 三つの話のうち、どの話をするかを決める。結局多数決がよいということになり、結果は「小さな男の子」に決まった。

(入園テストその他で十九、二十三日休園)

十一月二十四日 第二回相談

どのように紙芝居にしたらよいか、教師側としては考えをもっていたが、表面には出さないので、こどもたちの意見をきく。

こどもたちの意見は、次の通りである。

・ 絵の裏に絵本の頁をはる。(話をする人のために)

・ 絵の裏に字をかく

・ 黒板に字をかいておく

・ 話をしない人が、紙をめくればよい

・ 話をしない人が、絵の裏に字をかけばよい

・ 赤白(運動会の時の)に分かれて話をするのと絵をかくのに分かれる

・ 赤白に分かれてじゃんけんをして勝った方が、話をする方になるか絵をかく方になるかえらぶ

・ 話をいう人は、絵本の紙をもって話せばよい

・ 赤白に分かれて一番前の人が、じゃんけんをしてどちらかを決める

そこで、最後に次の二つのことで多数決にしたらよいくことになる。

① 全員が、絵をかき、話をする。

② 半数が、絵をかき、半数が、話をする。(この場合は、

赤白に分かれて、勝った方の一番前の人、どちらにするか決める)

多数決の結果

① 二十六名

② 七名

③ どちらでもよい 一名

大歓声のうちに①に決まり、②③に手を上げたこともも納得する。そして、全員が話すことができないので、話をしない人は、めくる係になればよいという意見がでて、みんな賛成する。

次に、絵は二人組でかく。一緒にかきたい友だちと二人一組になる。その二人の中で、話をする人とめくる係とを決めさせる。そしてどの場面をどの組がかくかを決める。それから、絵の具やクレヨンの色が目立つように、うすいクリウム、ピンク、きみどり、白の四色の紙を使うことを知らせる。

表紙と裏を入れて十六画面にする。絵本をもとにすることは、いわなくても子どもたちは、とてもよくわかっていた。相談に要した時間は、一時間余りだったことが後でわかり、びっくりする。

十一月二十五日

登園後、かきたいグループから、かきはじめる。各グループとも、組んだ相手と相談をして、紙の色をえらび、教師は何もいわないのに、絵本の中から自分のかくページをはずし

て、どうかか相談をしてかいている。

十二枚が出来上がった。

降園時に、絵の片すみにページ数をかき入れ、めくるようにまとめることを話す。(教師としては、間に合うかどうかとても心配)

十一月二十六日

残りの絵四枚をかきあげる。話をする人だけ集めて、自分の場面の話を覚えさせ、順番にやってみる。

降園前に誕生会をするホールへ行き、舞台の上で、マイクを使い、クラスのことまたちの前で本番と同じように、練習をする。(明日が本番で、果たしてことばを覚えているか心配。きちんと同じ、用意をする。)

十一月二十七日 誕生会当日

全員舞台のわきの廊下に場面の順番に並ばせ、自分の番が済んだら席にもどることを約束する。子どもたちは、きちんと順番に並び、ことばも忘れずにマイクの前で話をする。みている年少組も熱心にみてくれる。

結果

教師の心配もよそに四日間で紙芝居の製作ができたことは、

一つの驚きであった。もっと日数があつたらもつといいものが……ということを考える前に、こどもたちが、わずかな日数の中で、相談をし、まとめ、絵を協力してかき、自分の役割を知り、実行できたという満足感を味わったことが、大きな成果だったように思う。

誕生会の当日、どうしてもママに見てもらいたいといつてせがんで、みにきてもらったこどももいた。今までの経験の積み重ねがそうさせたといつてしまえば、一言ですんでしまうが、ここで、どんなことが(要素が)、この結果を生んだかをみたいと思う。そこには失敗や、やりとげずに終わってしまったこと、何人かのこどもだけが経験し、全員にゆき渡らなかつたこと、計画倒れで終わってしまったことも何らかの刺激になっていたようだ。三年間の二度の組がえも、一つの要素になっているかもしれない。

結果の考察

何がその結果を生んだか、最終的な結果はもちろん導けないが、考えられる大きな活動を思いおこしてみると、

- 短い歌をつくったり、友だちと活発に遊ぶ。(三歳児)
- 「おじいさんのふしぎなポケット」の話を全員でつくり、

げきをする人と解説をする人に分かれてこども会にする。

(四歳児三学期)

○羽田空港見学から発展したのりものごっこが町づくりになる。そして役割を決めて年長組二クラス合作で展覧会をし、年少組や母親をお客さまによぶ。一ヵ月余り続く。(五歳児一学期)

○夏休みの生活発表を一人ずつする。(五歳児二学期)

○運動会の会場づくりの手伝いで入退場門をどのようなものにするか年長組二クラスで相談し、製作を手伝う。(五歳児二学期)

○その他

運動会の練習、ことばあそび、一冊の本(童話)を毎日少しずつ話をきくなど。

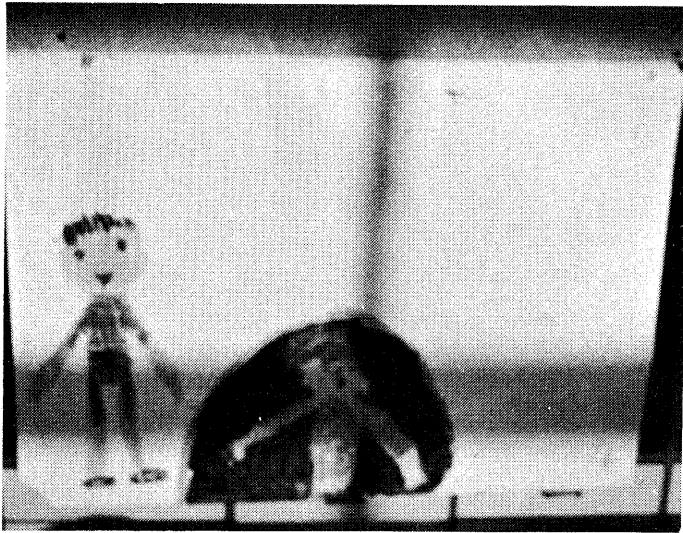
以上は、具体的な例であるが、それに含まれていない活動が、大きな力をもっているように思われる。

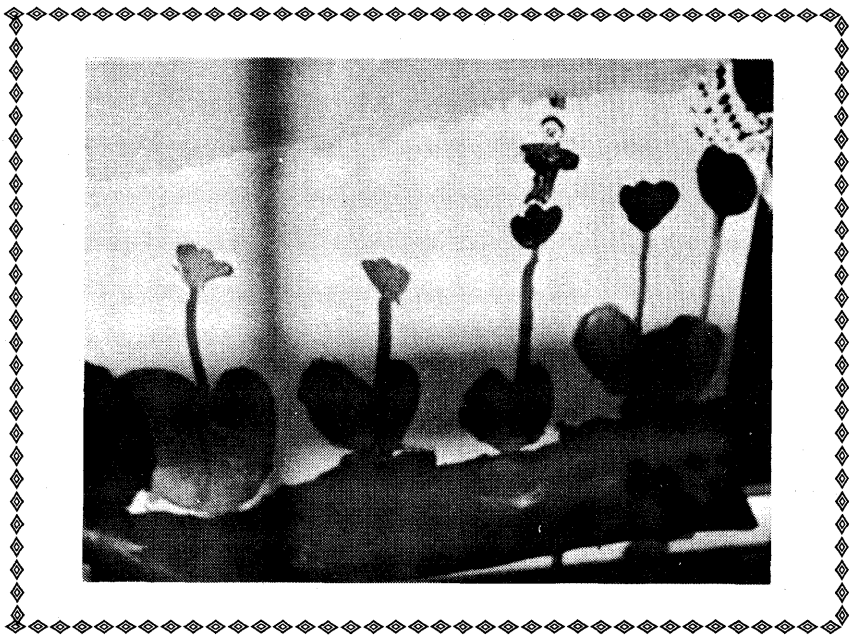
活動をしている時のこどもたちの真剣な態度と熱中しているはりきった毎日。こどもたちみんなが一つの方向、目的に考えを傾けて協力できたことが、この紙芝居づくりのなによりうれしいことであった。

(私立暁星幼稚園)

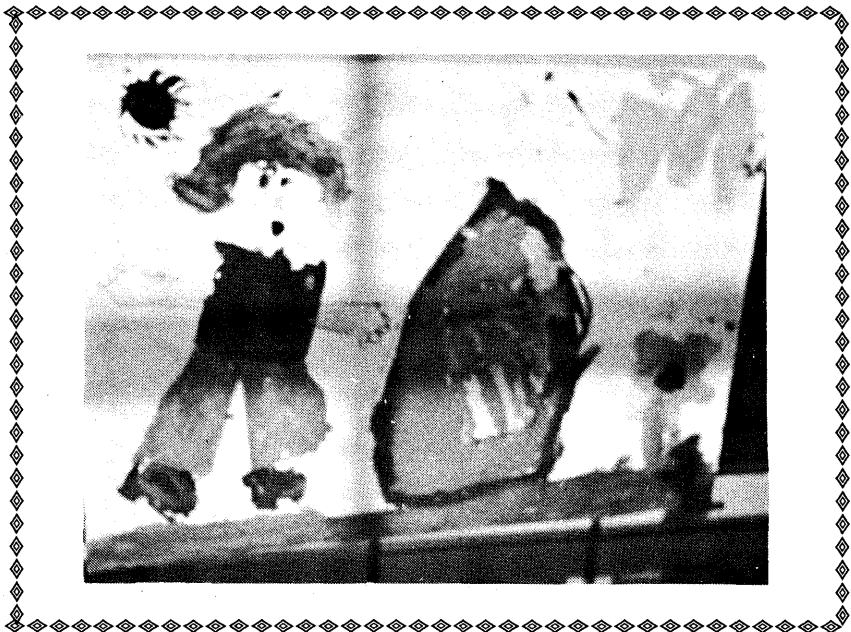
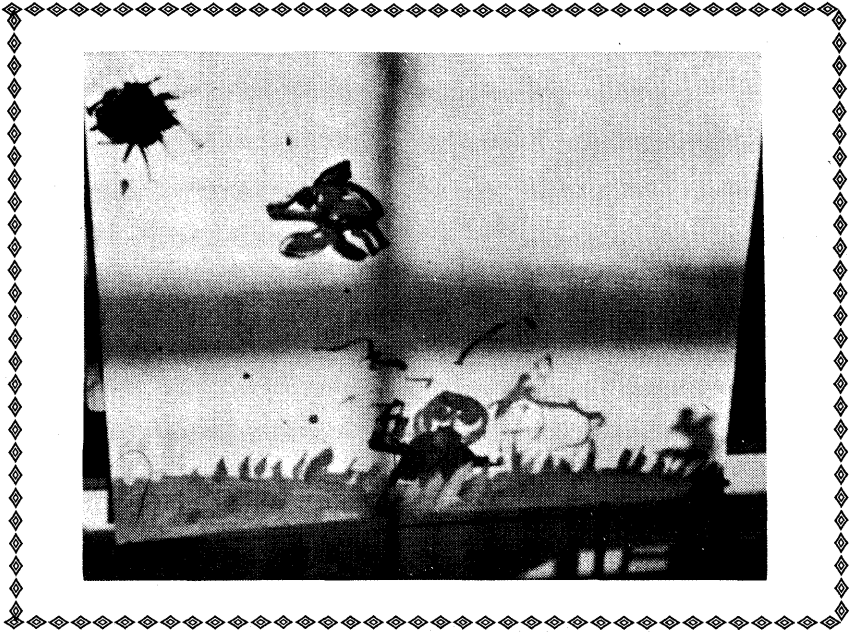
ちいさなおとこのこ

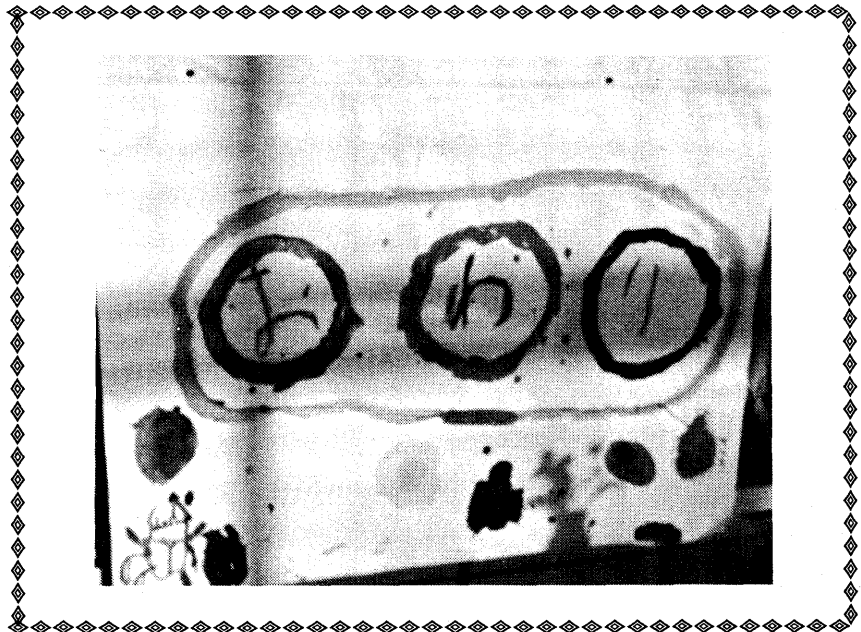
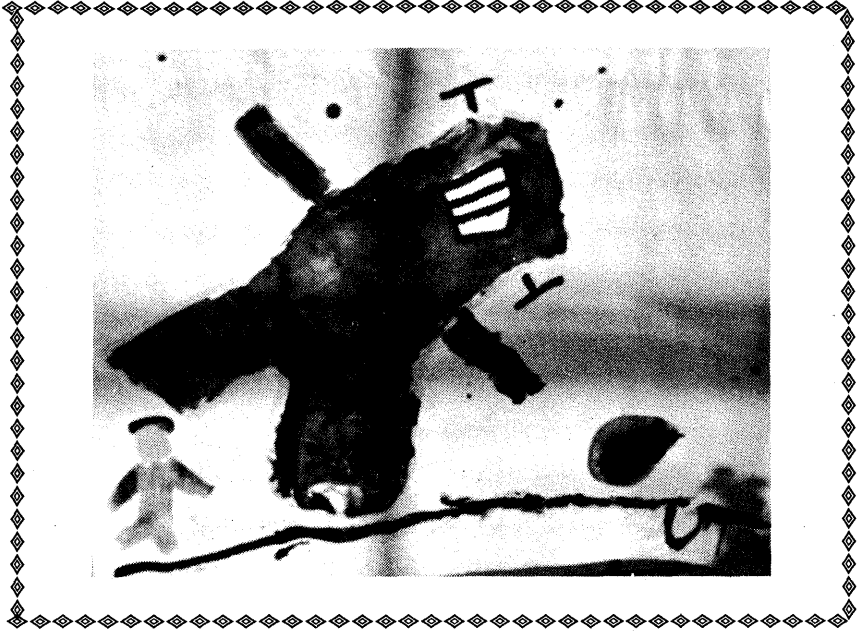
- 1 ちいさなちいさなおとこのこが、ちいさなちいさなどんぐりをひろいました。
 - 2 おとこのこは、もっともっとちいさくなってありんこみた
 - 3 もっともっとおとこのこがちいさくなくてもっともっとち
 - 4 いさなどんぐりをひろいました。
 - 5 になげんがおったので、おとこのこはかくれました。ふ
 - 6 つうのになげんがかいじゅうみたいにおおきくみえました。
 - 7 おとこのこが、もっとちいさくなって、どんぐりがもっと
 - 8 おおきくなってどんぐりにあなをあけたらおとこのこがはい
 - 9 いるようになりました。そこでどんぐりでおうちをつく
 - 10 りました。
 - 11 おとこのこがおうちからでてきたら、あつというまにほう
 - 12 きではかれてしまいました。ふつうのになげんがほうきで
 - 13 はいたので、おとこのこはとんでいってしまいました。
 - 14 おとこのこはとんでいって、おはなのうえにおっこちまし
- た。
- おはなからでてみつをくんでのみました。
- くきからおりてどんぐりのおうちにかえりました。
- なにかたべたくなっておさらをだしてバナナをたべました。
- ごはんをたべてあめをなめてどんどんふとってきてからだ
- がふくらんできました。
- ふとってきたのでぶたみたいになりました。
- かいじゅうエレキングがでてきて、おとこのこはふんづけ
- られてしまいました。
- どんぐりのおうちがおおきくなってわけてしまいました。











幼児の人物画について(二)

一 年齢差の表現



青 木 隆

五 おとなと子ども

前回は藤沢市のある幼稚園で得たハリスの人物画検査の結果を中心にして、幼児がどのようにして男性像と女性像を描きわけているかについて述べたが、今回はおとなと子どもを区別して表現しているかどうかについて考えてみたいと思う。

おとなと子どもの外見上の相異点の第一は身長差である。

同一の画面におとなと子どもを同時に描くのであれば、画像の大小によって身長差を表示することも可能であるが、今回実施したハリスの人物画検査のように別々の画用紙にそれぞれの人物像を一つずつ描く場合には、三枚の画面における画像の大小関係という意識はうすく、まして、私の場合には出来上がった作品はその都度提出させてしまったので、三つの作品を直接比較

しながら描いてゆくということが不可能である。それゆえ画像の大きさは先に描き上げた画像と関連させて決定されるのではなく、個々の画面空間に対応するような適度な大きさに描かれたと見なすべきであろう。以上のような理由で、このような検査の実施法によって、幼児のおとなと子どもの身長差を表示する能力の有無について解答を求めようとすることは不可能であった。しかしながらごく少数ではあったが、一枚目の男性像・二枚目の女性像（いずれもおとな）は画面一パイに大きく描き、三枚目の自画像のみを画面中央に小さく描き表わしているものもあった。

同一画面内における場合のように、画像の大小によるおとなと子どもの表現が見きわめられないとすると、第二にあげる可能性として、人体のプロポーションの相異が残る。日本人のお

となはおおよそ6.5頭身から7頭身にあたりとされているが、幼児はおとなに比して頭部が大きい。幼児の描く人物画は実際の人体に比してはるかに大きな頭を描き表わす傾向が強く、個人差がかなりあるがその代表値は3頭身から4頭身の間にあり、この間と思われる。表1は藤沢市の前回とりあげた幼稚園における

図1 3頭身以上の画像の出現率

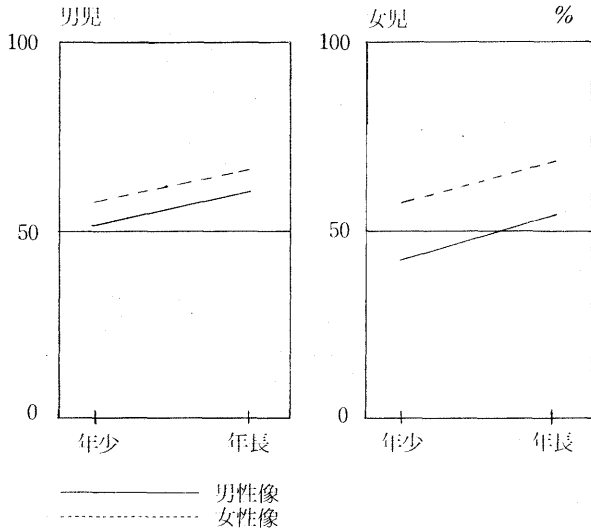


表1, 3頭身以上の画像の出現頻数

	年 少 組		年 長 組	
	男 児	女 児	男 児	女 児
N	57	43	58	48
男性像	29	18	35	26
女性像	33	25	37	33

標本(前号参照)で3頭身以上のもの——画像の全長の $\frac{1}{3}$ より小さい頭部を描いたもの——を示している。図1はその百分率が示してある。この例だけでは十分なことはいえないが他のデータなどから類推して、年齢が進むに従って身長に比して頭部の大きさは小さくなってゆくとと思われる。(児童期になっても実在の人体のプロポーションに比して頭部が大きいことは変りないが、その差が小さくなってゆく)またこの表には示されていないが、自画像との間に相異はなく、男性像・女性像の間にも男児・女児の間にも統計的な有意差はなく、3頭身前後の画像が多いように思われた。

(厳格な数値を算出した訳ではないので、偏差は不明。しかし3頭身から3.5頭身の間を平均値

とする正規型にちかい分布を示すように思われた)

以上のように幼児の人物画にあっては、おとなと子どものプロポーションの差に基づく区別を表示したものは見られないと考えられる。

それならば、どのようにして年齢の差を表示しているのだろうか。前回の表2に示したとおり、年長組では子どもとおとなを描きわけているものが20%ないし30%ある。これらは男女の性別を髪形や衣服によって表示したのと同様、これらに類するものによって年齢のちがいを区別させている。男児の場合はおとな(男性像)と子ども(自画像)とはネクタイの有無によって相異を示している。また女児では髪形によるものが多く、自画像ではおかつぱ・おさげ・ポニーテール、あるいはリボン飾りなどに、女性像ではカールした髪などである。

女児は男児に比して衣服の描写に優位であると述べたが、女児が衣服そのものによって年齢のちがいを描写している例が少なかった。実際最近の若い母親たちはミニスカートなどの流行もあって、特に様式的には女児の服装と大きな差異は認められないようである。たとえばワンピース・ブラウスまたはジャケットとスカートの組合せ・ジャンパースカートというような様式ではおとなと子どもの区別が成立しない。せいぜい肩つりの紐のあるスカートが少女らしいといえる程度である。これに反

し靴やアクセサリー、これに類するものには区別のつけやすいものがある。今回の標本ではわずかであったがハイヒールはしばしば見受ける。またネックレス・マニキュア等も散見する。小学生になるとこのような小道具の種類は多くなり、前記の他に、男性像ではタバコ・パイプ・腕時計・ゴルフのクラブ等で、女性像ではサロンエブロン・買物籠・ハンドバッグ等が見られ、共通したものとして眼鏡がある。幼児期の作品に多いものとして男性像のひげそりあとを表わす細かい描点も興味あるものの一つであろう。

以上のように幼児の人物画検査に現われた結果から判断すると、おとなと子どもを区別した表現は、幼児にもすで見られるという点を第一にあげることができる。そしてその表現方法はプロポーションの相異によるものではなく、髪形や衣服類の相異によって表示されている。しかし表現内容は全く断片的でありながらきわめて具体的であるということができよう。前回には性別の表現について、基本的な人体像が確立し、その上に細部的な操作をほどこすことによって男性像としたり、女性像としていると述べたが、次の段階として男性像・女性像はさらにそれぞれ子どもとおとなに分化して行く。……とみなしてよいであろう。そして表現方法は両者とも全く同一の形式であるといえる。けれども幼稚園の段階では半数以上はまだ年齢の相

異を十分に表現するに至ってはいない。

六 予備の実験

次に幼児の性別や年齢差の表現に見られたような表現様式をいっそう明確に知るために二・三の実験を試みた。

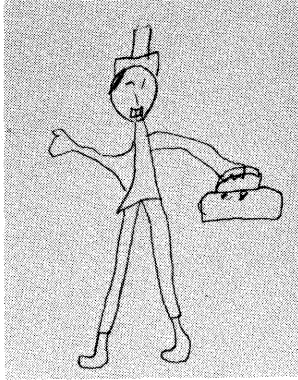
A 年齢のちがいをおとなと子どもというような対立する関係としてではなく、年齢を連続的な変化として五段階に分けて描かせて見た。対象は幼稚園児から小学校四年生までの十四名にすぎない。各自に画用紙(サイズB5)五枚を渡し次の課題によって描かせた。1赤チャン、2幼稚園児、3小学生、4高校生、5おとな。なお原則として男児は男性のみ、女児は女性のみとして、二、三名の小グループで実験を行なったが、お互いの作品が見えないように特に配慮した。

この結果からプロポーションの相異によって年齢のちがいを表現しているのは四年生に見られるだけであった。これらの作品は身長と頭部の比を年齢に対応して変化させるばかりでなく、年齢の低い画像は頭部をややひらいた丸顔にし、おとなになるに従って縦長の楕円にしている例もあった。しかしながら幼稚園児から二年生までは、人体の主要なプロポーション・頭部と身長之比・肩巾・脚の長さなど、年齢に対応する変化は見られず、まるでせかせかえ人形で遊んでいるのと同様に部分をとりか

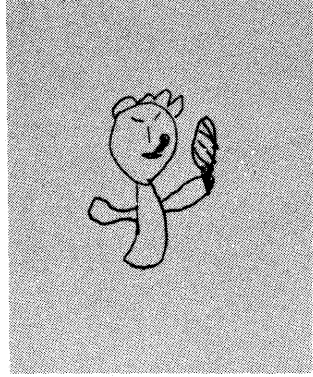
えて年齢の変化を表わしている。(写真1・2・3)

赤チャンはフリルのついた帽子・よだれかけで表わされ、以下幼稚園児は肩つりのある通園鞆・小学生はランドセル・高校生は手さげ鞆：というようなきわめて明確な一連の組合せを作って課題を解決していた。私は描画にさきだつてこの課題は幼稚園児にはもちろん小学校の低学年児にもやや困難ではないかと思い、一歳・五歳・十歳……というような教示をやめて、幼稚園児とか小学生というような身分を示す言葉に改めたほどであった。しかし実際には……私の読みが浅かったというか、いさか拍子抜けがする思いであった。またこのような一連の主題では、こちらが意図する目的が容易に被験児に察知され、描画にあつたつての留意すべき問題点が具体的に理解されており、人物画検査におけるより以上に年齢のちがいを描きわけねばならぬとする姿勢が感じられた。

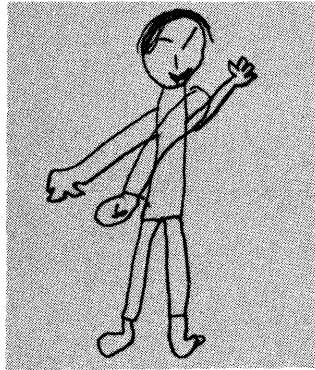
このささやかな実験で興味ある発見は、幼稚園児・一、二年生では人体のプロポーションは固定的といったが、赤チャンだけは例外で頭部を大きく表わしている。一年生の女児の一人は「頭が大きい方がかわいいから……」といていたが、私が想像している以上に「表現」という意識が育っているのかもしれない。



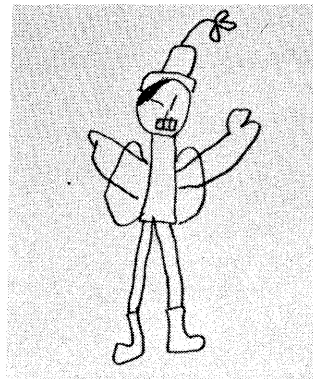
D



A



B

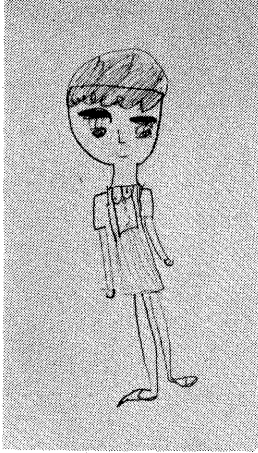


C

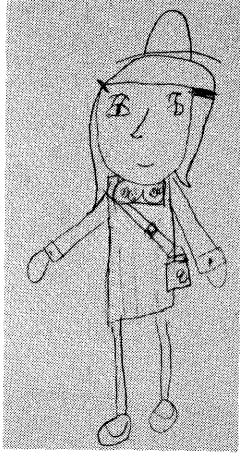
写真1

男児（6歳）幼、年長

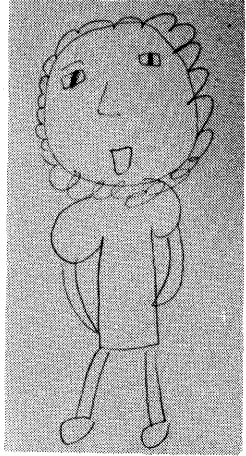
- A 赤ちゃん あめを持って舌を出している
- B 幼稚園児
- C 小学生、ランドセルのつりひも
- D 高校生



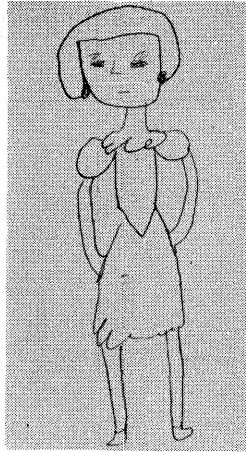
C



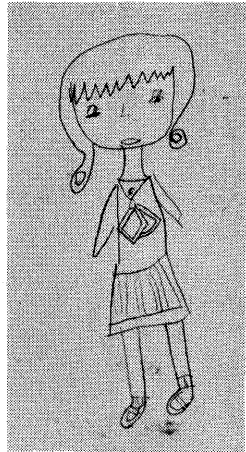
B



A



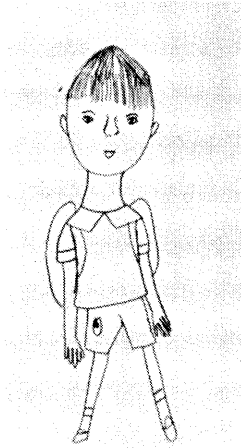
E



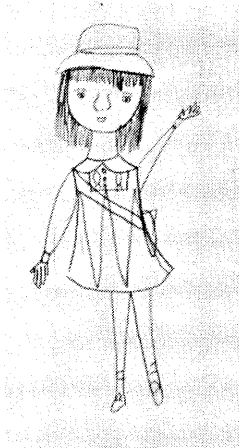
D

写真2
女兒(5歳)幼、年長

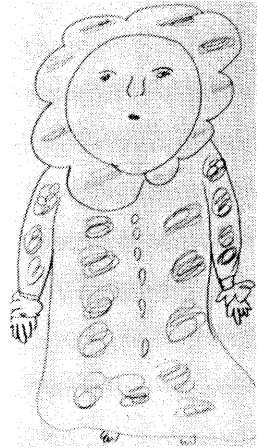
- A 赤ちゃん
- B 幼稚園児、制服
- C 小学生
- D 高校生、セーラー服
- E おとな



C



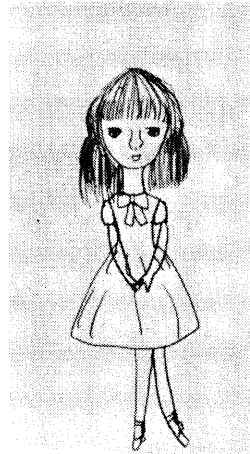
B



A



E



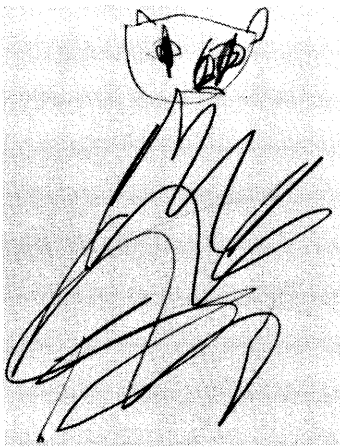
D

写真3
女兒（7歳）小、1年

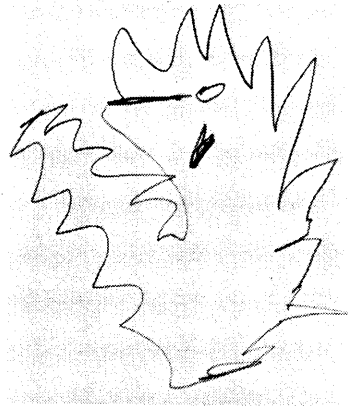
- A 赤チャン 頭部が他の像に比して大きい
- B 幼稚園児
- C 小学生、この像だけ男性
- D 高校生
- E おとな、エプロン

B この一連の連続的な年齢差を描きわけける実験と平行して、別の課題による描画を試みた。それは「いたずらっ子」を描くものである。最初はいたずらっ子と鬼または悪魔の二点を描いてもらったが、途中から一枚目を自画像として合計三枚とし、最終的には鬼、悪魔をはぶき自画像といたずらっ子のみにした。実施方法は前述のものと同様で、被験児は幼稚園から小学六年生までの約四十名である。研究の目的は一般的人間像に対立させて、特殊な条件が附加された人間像をどのように表現するかを知るためである。

細かい説明は省略するが、幼稚園・小学校低学年ではいたずらっ子と自画像の間に、次のような相異がみられた。1、毛髪をなぐり描きのように乱暴に描く。2、口を大きく描いたり、歯を描写する。3、目じりをつりあげて描く。4、鼻を大きく描いたり鼻孔を表わす。5、画像をことさらゆがめシンメトリをくずす。6、描線をことさら粗雑に描く、7、衣服のやぶれ、よごれを描写する……。などである。多くのいたずらっ子の画像はここに示した項目の一つかせいぜい二つを表示しているにすぎない。鬼・悪魔についてもこれとほぼ同様の傾向で特筆すべき点はないが、頭に角を描きさえすれば鬼を表示したことになる。年齢が進むにつれて大きな胴や肩、力こぶなどを描き表わす) — (写真4・5・6・7)



B



A

写真4

男児(4歳)幼、年少

ジグザグの描線やなぐり描きによって正常な画像と対比させている興味ある作品

A 悪魔(怪獣か)

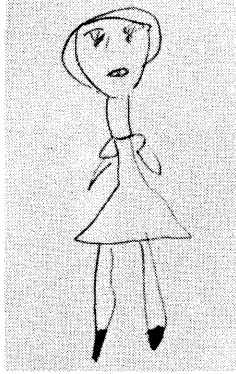
B いたずらっ子

写真 5

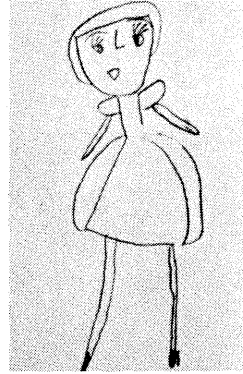
女兒 (6歳) 小、1年
全体像としてはまだ大きな変化はない

A 自画像

B いたずらっ子 口の中に
歯が見える



B



A

写真 6

男児 (6歳)
小、1年
人体のパターンは
同一、右自画像、
左いたずらっ子、
口を開いて歯が見
えている、描線が
やや粗雑になって
いる

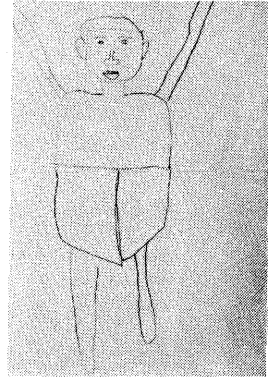
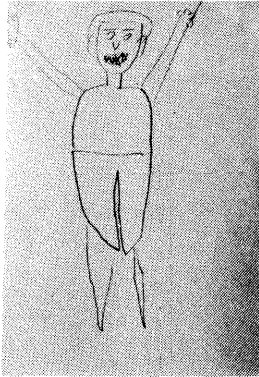
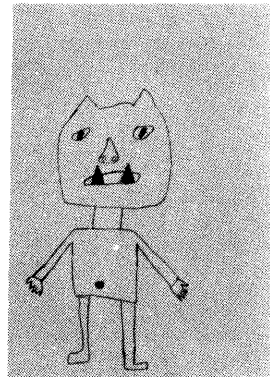
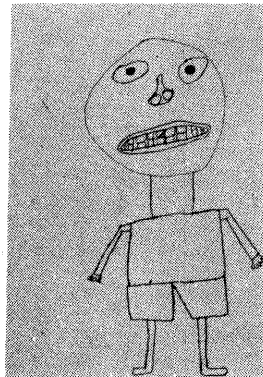


写真 7

男児 (6歳)
幼、年長
右鬼、左、いたず
らっ子



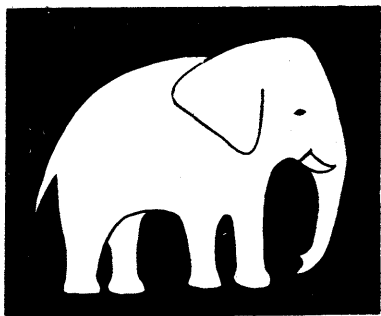
C 次にあげる例は描画活動そのものによる実験ではないが、関連があると思う。それは被験児に五枚一組からなる絵画を見せて、どれが一番好きかを聞き、以下好きな順に順位をつけてもらうものである。主題は少女・象・手・亀・自動車の五種類からなり、それぞれは五枚一組となっている。五枚の作品はいずれも写実的なものから単純化されたものへと五段階に區別出来るように描いた。(図2)

被験児は幼稚園児(年少・年長) 小学校一年生の男、女二十四名であった。実施方法は一対一、机をはさんで対座し、五枚のカードを横一列に並べ一番好きな絵から順にさしてもらった。そして再度最高位のもの、最下位のものを確認しその理由をただした。カードの呈示方法は常に最も写実的な絵の位置が一定しているようなことがないよう、それぞれ呈示するカードの配列順序は一見ランダムであるかのようにあらかじめ決めておいた。

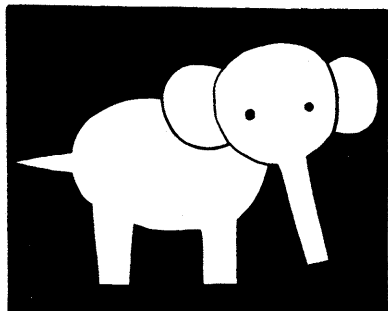
結論だけをいうと、幼稚園の年長クラスと一年生は写実的な傾向のものを第一にとりあげ、最も単純化したものを最下位にしている。これに反し年少クラスの段階では全く私の予定した順位とは関係のないカードから選んでいった。象は「目がかわいいから」といって選んだり、少女の像は「靴がいいから」「リボンがいいから」とかの理由で選ばれている。そして甲羅を細

かく描写した亀や、陰影をつけた手については気持が悪いとい
ってさけてしまう。年少クラスは部分の価値が全体像の価値と
混同されているかのように思われたが、年長クラス以上が写実
的な描写を指向しているかという点、これは疑問である。亀や
象の絵では「脚の爪がちゃんと描いてあるから」という理由で
写実的傾向のカードが選ばれている。そこで自動車の絵だけで
他の作品とは異った内容をもたせておいた。写実的傾向の内容を
二つに分け、一方は自動車のプロポーションをできるだけ正確
に描き部分を省略し、他の全体のデッサンをくるわせ細部の説
明はなるべく多く描写しておいた。(図3、A・B)これに對
してほとんどの年長グループ、一年生はプロポーションの狂っ
た細部描写の多い作品(図3、B)を第一にあげ、「バックミラ
ーやナンバープレートもハンドルもあるから」という説明を行
なっている。

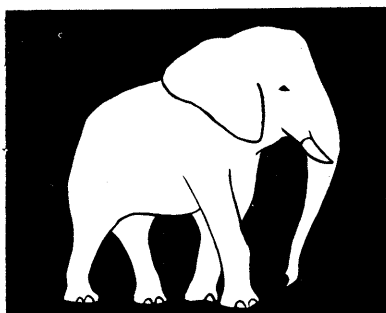
以上の結果から幼児期の絵の好みは年少の段階ではどこか一
点だけ気に入るところが存在すれば、全体像の価値が決定され
ているかのように見受けられ、年長組になると好ましい部分の
描写が多いほど好きな絵ということになり、そのさい全体像の
プロポーションの狂いはさして重要な意味をもち得ず、選択の
基準に関与していないかのようにさえ思われた。そして年少児
と年長児とがそれぞれ選んだカードは相異していても、選択の



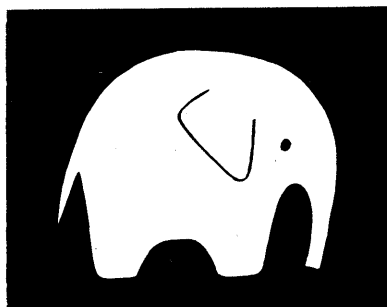
D



A

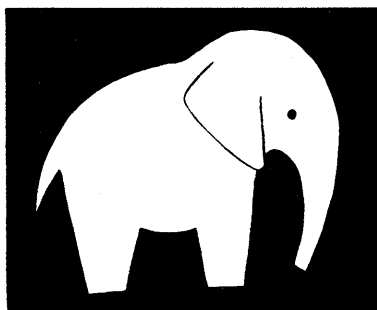


E

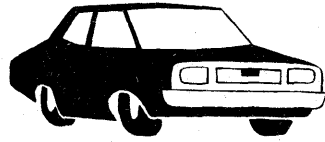


B

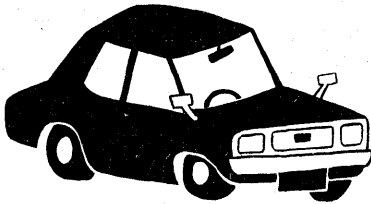
图2 象



C



A



B

図3
自 動 車

原理的な相異があるのではなく、単一な好ましい部分から量的なものへと発展しているにすぎないと見なしてよいであろう。ここに示した絵画の好みの選択基準も、描画における描写の発達の方向もきわめて類似した形式をもっているかのようである。この点に関しては今後十分な研究の積み重ねが必要であるが、今回の予備調査をよく再検討して発展させいずれ改めて詳細を報告したい。

なお、年少グループでは象の絵で図2、Bを第一順位に選んだものがなく、ほとんどが2、Aであり、第二として選ぶのはむしろ2、Cであった。年少児は理由を求めても「どうして〜」と「すぎだから」とか返答になっていないものが多いが、目がかわいいという理由づけもかなりあった。それならば2、Bが選ばれる可能性もあるはずである。この疑問に対して私は次のように解釈してみた。図2、Aは脚や尾の区分が明瞭であるのに反し、図2、Bでは全体像を一つのまとまりとしてそのまま単純化しパターン化している。この相異から推して——年少児の好みをより一層分析してみないとわからないが——全体を構成する部分の区分が明快に説明されていることが重要な条件ではないかと考えてみた。

この絵の好みに関する予備的な実験は実は幼児の絵本についての基礎的な研究を進めるための準備でもあった。絵本の表現

様式は多種多様であり、絵本の新刊書の書評が一般の新聞に掲載されるほどである。しかしながら子どもの側からの評価をまとめた研究は発表されていないように思われる。そこで私は子どもの童画に対する評価や、その発達についても調査したいと思ひ、その端緒として上記のような実験を行なつた訳である。上記の実験と同時に同年齡の小グループを作つて実際に刊行されている絵本を見ながらブレンストーミングのまねごとをしてもらつた。私が選んだ絵本は日本・スイス・イギリス・ドイツ・アメリカの五種の「赤ずきんちゃん」を中心とするもので、他に特に個性的な画家、たとえばワイルドスマイスなどの絵本を数点加えてみた。結果は絵の好みの調査結果ときわめて類似した傾向を示し、かなり細部の説明的な描写が好まれるようである。たとえば子どもがはじめてであう絵本「うさこちゃん」のシリーズで知られているディック・ブルーナの「赤ずきん」は年長児にはほとんど受け入れられず、「この赤ずきんはにせものだ」という園児さえあつた。

七 家族画

おとなと子どもの身長差をどのように表示するかについて調査するためには、前述のように同一画面におとなと子どもを描かせるものでなければならない。以前から家族画法という技法

があるので、この方法によつて調査してみた。被験児は幼稚園年少組から小学校五年生までの六十七名である。家族画は本来児童を中心とする家族関係を診断するために利用されてきた。しかし私の目的は身長差をどのように表現しているかを知りたいにすぎない。

三年生以上の被験児は十六名であつたが、ほぼ全員が身長差を表現していた。また幼稚園児でもすでに身長がちがいを區別して描いているものもある。大麥稚拙な段階にあつても身長差を表示するものもあり、逆にかなり細部的な衣服の描写を行なつたり、衣服によつておとなと子どもの相異を表示しているにもかかわらず、身長差が表示されていないものもあつた。(写真 8-11) 標本数が小さく決定的なことはいえないが、幼稚園児から二年生までは、親と子を並べて描いても身長差を表示するとは限らず、むしろ統計的には身長差を表示しないものが多いといえる。

身長差が表示されていない場合でも二つの異つた内容をもっている。一つはすべての画像の大きさがほとんど等しく描かれているもので、他は画像に大小はあるが現在の人物の大小に対応していないものである。後者の場合には当人を表わす画像が父親の像より大きかったり、おばあさんだけが極端に小さかったりする。投影法による診断ではこの種の画像の大小をそのま

写真 8

男児 (4歳) 幼、年少
左から父、弟、母、当人、
技術的には稚拙であるが、
性別身長差は表示されて
いる

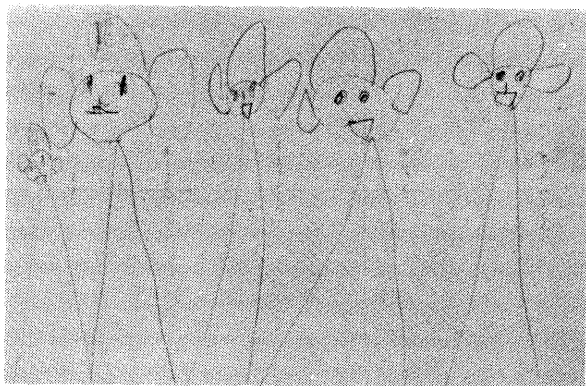
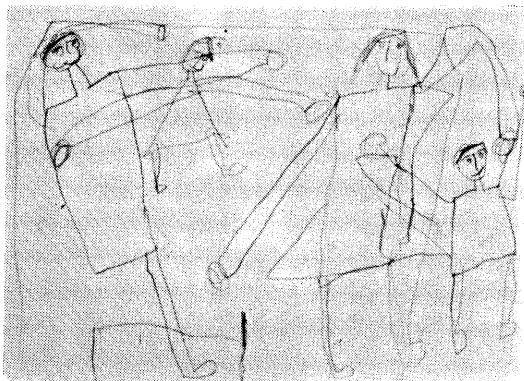
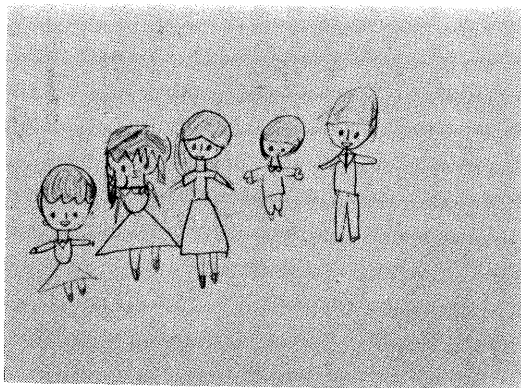


写真 9

男児 (5歳)
幼、年長
左から下の弟、父、
母、当人、上の弟
全く未分化である

写真 10

女児 (7歳) 小、1年
左から、妹、当人、母、
弟、父、不明確ではある
が身長差は認められる、
余白が多い



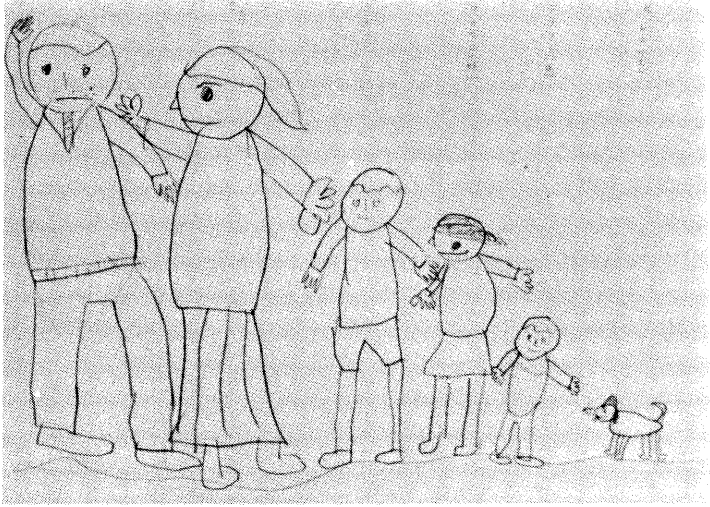


写真11 男児（8歳）小、2年
左から、父、母、当人、妹、弟、犬、年齢の順に描いている

表2 家族画における身長差の表示 描画順序

	学年	幼	1	2	3	4	5
	N	18	14	19	5	8	3
身長差の表示		5	4	9	5	7	3
描画の順序	正	2	3	6	3	2	0
	逆	4	0	6	1	3	2
	他	12	11	7	1	3	1

正一年令の大きい順に描いたもの

逆一年令の小さい順に描いたもの

ま心理的な重みの反映と解釈しているように思われる。たしかに描かれる画像の順序、大小、配置などによって、ある程度の幼児から見た家族関係を知ることが可能であろう。しかし特に年少児などは家族の人員に見合った数の画像を描くためには、画面にどのように分配してゆけばよいのかわからず、なかなかうまく構成することができない。たとえば画面の左すみから右に向かって四人を配置すべく描き始め、三人目を描きおえた段階で画面の右側にまだ広い空間があ

れば四人目の画像は太った大きな人物像を描いてしまう。逆に三人目を描いたら右側にほとんど余白がなく、しかたなしに画面の上方や下方に小さな画像を描き表わす場合もある。このように画像の大きさを操作することによって画面を一パイにしようとする傾向は年少幼児にしばしば見られるが、年長になるに従って余白の空間的条件に左右される傾向は弱くなり、画像独自のプロポーションを守るようになる。しかしその反面、画面の中央や右すみに四、五名の家族がかたまっているかのように見える余白の大きい作品も多い。これはあたえられた空間に決まった人数の画像を、どのような大きさでどこに描いていたからよいかを見とおす能力がまずしいために起こると考えてよいのではないだろうか。

八 まとめと考察

前回は幼児が男性と女性の画像をどのように描きわけるかについて述べ、今回はひきつづいておとなと子どもをどのように区別して表示するかについて考えてみた。幼児がこのような差異の表現を行なう形式は全体像的な概要を把握することによるもの、たとえば身長差とかプロポーションのちがいでではなく、細部の特徴をとりあげて表示するかたちといえる。つまり衣服の部分とか髪形をかえてそれぞれの主題の特質、差異にあて

ている。これらの問題を明確にするために二、三の実験を試みた。

その一つは年齢を五段階に区分し、赤チャン・幼稚園児・小学生・高校生・おとなの五点を描かせた。

その二は自画像といわずら子（一部は鬼または悪魔を加えた）を課した。

これらの調査によって幼児から小学校二年生前後の段階までは、課題の特質にそった具体物を描写して解決していく表現形式がとられていることが決定的であるように思われてきた。

第三の実験は直接の描画行動を必要とする方法ではないが、単純化した図形から連続的にやや写実的傾向をもつ図形に至る五段階の絵カード五組を用意し、それぞれの一組の絵に好きな順位をつけてもらった。この結果は絵画の全体像的な把握に基づく評価ではなく、好ましい部分の有無とか構成する部分の完備の度合が評価の基礎にあるかのように見受けられた。

次に家族画によって年齢の変化に対応する身長の変化を表示しているか否かを調査したところ、幼稚園児から二年生までの五十一名中身長差を表示しているものは十八名で、半数以上が身長差のちがいを描き表わしていないとい得る結果をえた。

幼児の人物画の発達には、主題の内容が漠然としたものから明確なものへと移行し、描写によって限定される範囲は漸次「的」

がしぼられて行く。と同時に主題に附加される条件が多くなる
ともいえる。たとえば最初「おかお」とか「ひと」であった人
間像は、やがてママ(性別)となり、「ママがお買物してると
こ」に変化する。附加される条件が増すたびに「ママ」なり、
「お買物」を成り立たせるための具体的な部分の描写が必要と
なる。

そのさい幼児は何をもって具体的部分としてこれにあててい
るのか……この問題についてふれておかなければならない。た
とえば「お父さん」という課題に対して、ネクタイを描写する
ことよって解決しているが、なにゆえネクタイが描かれたの
か、両者の結びつきは何を意味するのだろうか。単純な連想な
のか、シンボルなのか。それともお父さんという範疇に属する
ものとして選択され描写されたと解釈すべきなのか……等々、
一概に決めかねるし、実際いろいろの場合も考えられよう。ゲ
ッドイナッフやハリスの人物画を利用する技法は児童の概念形
成の過程を知るために開発されものと思われるが、この人物画
検査法を一つの拠点として、より分析的な研究を進めることが
今後の課題でもある。

(つづく)

幼児教育講習会予告

日時 昭和四十七年七月二十二日(土)

二十五日(火)

会場 お茶の水女子大学

講堂・体育館

主催 お茶の水女子大学附属幼稚園内

日本幼稚園協会

こんな本 あんな本



青木 秀子

るように思えます。その中から印象に残った何冊かをあげてみます。それはまたうけとる部分は異なっても、これから後も何度となく読み返されていくでしょうから。

一年目。主として倉橋惣三選集をはなさずもっていました。同じころ「斎藤喜博全集7」国士社、を手にしました。これは、場は小学校を中心とした教師論、現場ノートですが、実践から出発しており、表現は異なっても、倉橋選集と共通するところが多いのです。教育のはかなさ（一つの仕事を全力を尽して創造するがそれが終わればよりきびしい高い次の世界がみえ……）を

まず述べ、教師も専門家としての仕事を創り出した時、教師としてのきびしさもあり喜びもあり、子どもの可能性を引き出すばかりでなく、教師自身をもずっしりとした重味のある人間につ

くりあげていくにちがいない。専門の仕事をもたない人間のみじめさからぬけ出すことにちがいない。……仕事と私生活とは一つだ。授業に興味をもち、授業という決闘場が自分をよぶようになれば、どんな思いをしてもその時間を生み出し、授業の準備をするだろう……教育は、どちらかといえば、愚直なほどに愚鈍な人間が自分を悔いながらやっていかなければならない……」等々、一言一言、自分へのきびしさを要求され、反省させられるものでした。ともかく、保育理念や理論を中心に本をあさっていたといえます。

二年目。子どもとの生活の中では、言葉（理論）だけでは勝負できないことを知った時、保育技術を目で手で頭で追いました。そしてその莫大なことも知りました。またそれには「工夫して生きる態度」を身につけること、そ

現場に出て三年。いろいろな本にふれてきましたが、その時々の問題意識によって、選択される本にかたよりがありません。しかし、今ふりかえると、それにはそれなりの共通性と法則があ

れを子どもとの生活のどこに出しているかまで結びついた技術の必要性があるのです。どれ一つ、満足にできない私に残ったものは、先輩の先生のクラス卒業時の生きた子どもの姿であり、それを忘れてはならないと思っていた時、現われた周郷先生の「母ありてこそ」国土社、です。バラの花はもうこやくさくさくない」という言葉でした。

三年目。自分自身をみつめなおし、何かもともとと大切なものがある気がします。子どもとの生活の場でおおらかさ、そこにかもし出されるふんい気が、保育の大きな要素であること……を。

「すりばち学校の22年」山田修著、あすなろ書房、にめぐりあいました。これは、群馬県の山の中の野栗沢分校（職員一人と一、二年生の子ども九人）の生活が、野栗沢の自然と地域の人々

の生活とともにかかれています。二〇〇〇メートルの天丸山も谷川も山道も運動場なのです。部落全体が教材、部落民全員が教師なのです。……わたしは村の人からも村の子どもからもすぐなつかれました。わたしはこのおばあさんや子どもたちを裏切りたくない、村全体の方に喜んでもらうようにいっしょうけんめい働きたい。ただこの気持だけでいっぱいでした。……など。

決して肩をはることなく、しかししっかりと自分の全生活を子どもにぶつけ、子どもとピタリついた生活がそこにはあるのです。心と心のふれあう、まさに「保育の原点」が見いだせる気がします。大自然をいっぱいすいこんで、力強く、しかもあたたかいふんい気。先生と子ども、その土地へのくいこみ。そんな中で、素直に成長した

子どもの姿（「きご先生とすりばち学校」もあわせて参照）から改めてほんとうの教育とは何かを考えさせられます。

本の紹介にふさわしくない文になりましたがお許しください。ともかく今の私は、自分に素直に、感情をもって生きたい、人の心のあたたかみをうけとめられるようになりたいのです。心のつながりをつくり出すのに、自らの手を汚して、そのことを喜べる人になりたいのです。そこからまた、保育を考えなおしてみようと思います。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

大正から昭和のお茶の水の幼稚園

「日本幼稚園史」の著者、新庄よしこの
生きた時代

日本幼稚園史と終む

寛き心ときを欲うてあり付し

看りたきて書きさくありしか

弱き住ばんにあはぬをうしこして

一頁を籠り史書きつきの

い寝かてす夜半書きつけばあふしも

草のすくみのかくしも書き

昭和九年

よしこ



倉橋惣三・新庄よしこ共著「日本幼稚園史」の著者新庄よしこ氏は一月四日に死去された。日本の幼稚園の草創期の資料を保存するのに功績のあった氏を記念して、当時の園児の目から見た幼稚園の姿を掲載しておく。

上の写真は、新庄よしこ氏の「日本幼稚園史」編さんのころの自筆による短歌である。

津守 真

大正末期の

幼稚園

私はよく、同じ線の市電ぞいに勤め先のある父に連れられて幼稚園に行つた。父が帰るのを追つて泣いて、新庄先生を困らせたこともあったが、幼稚園は好きな方だったと思う。

在園中に皇后陛下の行啓があつて、子ども心にも特別な感じをもつた。私たちの林の組はお店やさんごっこをお目にかけた。私は八百やさんで売るものを粘土で作っていた。粘土をこね回している私に「それは何ですか」と陛下がおたずねになったことは覚えていゝるのに、何を作っていたのか、何とお答えしたのかは覚えていない。

大震災のあとで、園舎は粗末なバラックだったが園庭は広くてはずれの塀は煉瓦だった。すみの方に煉瓦がたくさんおいてあつて、それをけずつてはおままごとのご馳走にした。春にはたんぼばがいっぱいだった。聖橋ひじりの見え

る石段（今も残っている）の方までお散歩に連れて行つていただいた時の写真もある。

目をつぶると、天井の高い暗い廊下、お弁当をあたためるへや（これはふしぎと現在のお茶の水の幼稚園と全く同じように思う）一生懸命に見入つた人形劇等々、次から次と浮かんできて、でもどういふわけか、友だちのことは非常におぼつかない。わずかに家も隣り同士でいままも交際している、あいちちゃん、だけといていい。友だちのこととなると、母の方が覚えていゝる。

私が覚えていゝるのはやはり先生のこと、いつもはかま姿で、大きな目と、大きな声の新庄先生、私は幼稚園を出てからもずっと文通をかかさなかつた。そして私が保育実習科に入学した時は、もう新庄先生はお茶の水にはいらつしやらなかつたが、及川先生があたたか

赤間峰子

幼稚園時代の思い出、それはきれぎれではあるが、私にとってやはり忘れられないというもののようない気がする。当時お茶の水幼稚園は、本当に「お茶の水」にあつた。現在、医科歯科大学のあるところ、神田川に面して大して立派でない門があつて、そこからだらのぼりの道を行くと幼稚園であつた。門の前に立つと省線のお茶の水駅が見えて、その駅の模型を共同製作で作つたことを覚えていゝる。

く迎えてくださった。幼稚園のころ、及川先生は「よその組のこわい先生」だったのに私のことを私自身よりよく知っていらしたのにびっくりした。でも両先生とも私をいつまでたっても園児のように思っただけならいい。及川先生は「峰子さん」新庄先生は「峰子ちゃん」としか私をお呼びにならなかった。

これを見ると、幼児と保育者のかかわりは非常にむずかしく、大切にしなければならぬと今さらのように思う。残念ながら私の保育者としての期間は短かく、その上、間に戦争という大変なものをはさんで、とても望ましい保育、つながりができなかった。私は時おりその当時の園児のことを思い出し、新聞やテレビなどで名前を見るとあわてて名簿をめくって、本人だとわかった時は何だかわくわくするよう

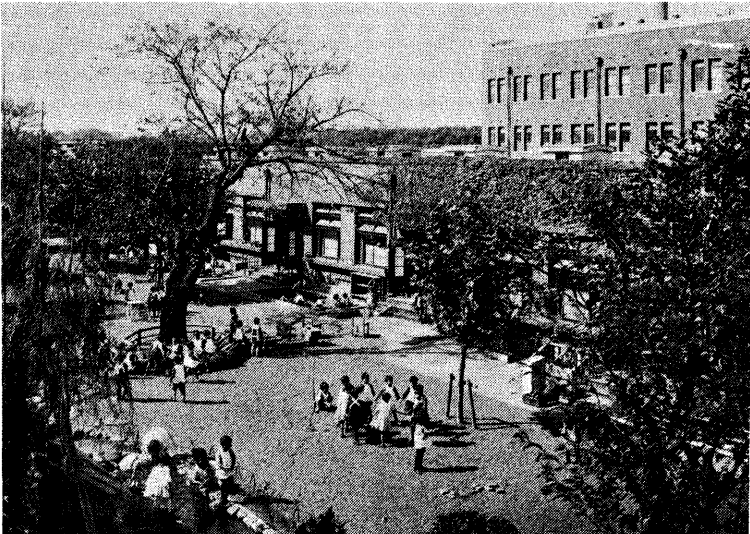
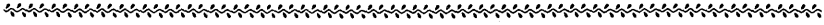
な気持ちになる。私が保育者の道を選んだのも、どこかに先生方のそのころに私に与えてくださった何かがあったのではないかと今にして思っている。

私の母も、先生方の中で一番印象に残っているのは幼稚園の先生だといつも話題にのぼったし、入学、卒業という時には一緒におたずねしたり、私の結婚の時にはまずお招きしたりした。母親にとっても最初の教育の相談相手は幼稚園の先生なのだ。それが時代が変わって私の娘の時代にも同じことがいえる。しかしどうも娘たちの場合はちょっとあっさりしすぎている。私はやはりいまだに娘の幼稚園の先生と文通して、こんなに大きくなったといつて成人式の写真など、お送りする。ところが娘たちは無関心に近い。終戦後のなんとなくすさんだ時代に幼稚園時代を過ごしたせいかもしれないけれど、

自分一人で大きくなったような顔をしている。私が、及川先生、新庄先生とつづいてお別れして、何か心のどこかに穴のあいてしまったような気持ちなど、娘たちには理解できないらしい。

幼稚園時代は、クラスで一番チビで先生のひざにのることはかなり考えていた私、そして保育科時代も、どうもその甘えがぬけなかったのか、実習中にお子さんに髪の毛をひっぱられて涙を出したりした私。そんな私が、はからずも今、この仕事についていることを、先生方は「おやおや」とおっしゃりながら、でもきつとどこかで見守ってくださる、と私は信じている。

（幼児の教育 編集部）



戦時中の

幼稚園

村石京子

新年になって早々に新庄先生がお逝きになられました。私の生涯の中で生まれてはじめてはいった社会である幼稚園の中で、二年間暖かく育くんで下さった先生がご他界になられたことは、とても寂しく悲しい思いでございます。新庄先生は大正六年に女高師の文科第一部をご卒業になられて後、大正十年から母校の附属幼稚園の教諭として昭和十四年までご在職になられました。

私が園児であったのは昭和十一年四月から十三年三月までの二年間であり、川の組（四歳）から海の組（五歳）の卒業のときまでずっと新庄先生に受け持っていたきました。そのことは、小学校のときのことにように順序をへて思い出せるものではありませんが切れ切りの記憶の中から少しづつひろってみたいと思います。

幼稚園のころ何をしてあそんだかというところで一番印象にあるのは戦争ごっこです。おりしも支那事変の最中であり、アルバムの中にも国旗掲揚とか、旗行列などが記念に残されている時代であり、国中が戦争意欲旺盛のこととて、子どもたちのあそびも戦争ごっこというのが毎日行なわれていました。男の子たちはクラスの中で敵味方と二軍にわかれて戦ったり、仮想敵陣を設けてそこへ攻めこんだりして

いたようです。そして私たちはいつも従軍看護婦でした。ときどき鬼ごっことかさくらさくらしまししょうなどと他のおそびが出てきても、一番ながつづきましたのは戦争ごっこであったようです。看護婦さんは腕に先生につくっていただいた腕章をはめてかいかいしく負傷兵を看護するのです。

そのころ南京陥落などもあって町中ちようちん行列でわいていたようです。同級に現在日本画家として活躍している友だちがいますが、その人は梅檀は双葉よりかんばしのたとえどおり、小さいころから画才があり、彼女のかわちちようちん行列の絵が、白地に紺と赤でいろどられた手ぬぐいとして出来上がったとき、ずいぶん素敵だと子ども心にも感嘆したものです。現在も附属幼稚園で運動会の参加賞などに子どものかいた絵をふきんなどに染めてい

時の流れの中の人間

—二十年をへだてて見た
米國、人・文化・教育—(1)

津 守 真

二十年という歳月は、その間にはきまってきたできごとをひとつずつ思い起こすと、大へんに長い間のように感ずる。しかし、二十年前によく知っていた人と再び顔を合わせて見るときには、二十年の歳月は一瞬にしてとび去り、昨日わかれたばかりのような気さえするものである。私は、昨年十二月に、二十年ぶりで米國の土を踏んだ。今回はサンフランシスコの郊外にあるスタンフォード大学で開かれた、幼児の発達と教育に関する会議に出席することが主目的であった。その会議の後、学会の用務のため、ミネソタとペンシルヴァニアに一週間の旅をした。ミネソタ大学はかつてその児童研究所で学んだところであり、二年間住んでいたところでもあって、二十年間、一度も会ったことのない友人が多勢いる土地である。専門の会議は、非常に緊張もしたし、それなりに収獲もあったが、この一週間の旅は、忙しい中にも、久しぶりで親しい友人に会うことができ、私の

視野をひろげてくれた。

実際のところ、私は親しくしていた友人たちの顔を、この目で見るまで、何か大きな変化があるのではないかということが心配であった。かつては、二晩三日間、荒野の中を汽車で走り通した土地を、いまは飛行機で三時間で飛んでしまう。ワイオミングからミネソタに近づき、ミズーリ河が二又に分れるあたりにくると、一面雪で蔽われた原野である。雪に蔽われた美しい市、ミネアポリスが近づいていることを感じたとき、知っている人たちがひとりひとりの顔を思い浮かべ、私の心は何ともいえず不安の中にあつた。だが、飛行機がとまって、送迎口に数人の親しい友人の顔が笑いかけてとびこんできた瞬間に、時間とはもはや何の重要さももたなくなつてしまつた。そのころ互いに理解しあつていた人たちは、直ちに、昨日別れたかのように迎えてくれたのである。

長い年月を経たことをまざまざと知つたのは、子どもの成長にふれたときであつた。* 私が泊つていた家の女の子、メアリアンは、そのころ三歳で、私がよくベットのつれていってねかつけた子どもである。一昨年結婚して、両親の家から遠くないところに住んでいる。一晩、一緒に夕食をしたときに、そのころ眠るときに離さなかつた毛布はどうしたかとたずねると、それはもう卒業したけれど、ずい分長い間手離さなかつたと笑

っていた。

その兄のリチャードは、そのころ幼稚園にいらっていた。テレビを買ってもらえなくて、いつもテレビのアンテナで遊んでいた。彼はいまラジオの放送局の技師兼アナウンサーとして勤めている。両親の家にはあいた部屋があるのにひとりアパート住いをしてる。私が夕食に来ることを知っているのにはあらわれないので、両親は電話をかけたが、経験上、そのような時に電話をかけるのは彼の独立心に障ることを知っているのので、電話をかけるのを控えている。夜おそくアパートにたずねた帰りには、母親は洗濯物とコーラのあきびんを一出自動車に積んで帰る。自立したいが、親の助けを必要としているある時期の青年の姿である。

私のためのレセプションの席にブルージーンの仕事着のままあらわれた青年チャックは、私が泊っていた別の家の男の子で、そのころ幼稚園に通っていた。彼は、いまミネアポリス市の公園の指導員をしている好青年である。帰り際に時間を無理してこの公園に立ち寄ったときには、彼はナースリースクールの年齢の子どもたち十数人におやつを食べさせているところであった。私はかつて一緒に遊んだ子どもが、いま子どもたちの世話をする実家家になっているのを見て大へんにうれしかった。

今回の米国の旅では、私は文化の差異を強く感じたので、今後差異を強調して教育問題を書くことがあるかと思う。しかし、その前に、人間としての共通点について、個人的体験を記しておかねばならないと思い、こんなことから書き始めた次第である。

* 昭和二十七年、八年の幼児の教育に、私が白橋惣三先生に送った手紙を掲載して下さったものがいくつかある。その中にふれている子どもたちのこと。

幼児の教育 第七十一巻 第四号

四月号 定価一〇〇円

昭和四十七年三月二十五日印刷
昭和四十七年四月 一 日発行

II 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

III 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村二ノ一

印刷所 凸版印刷株式会社

IV 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎ 本誌御購読についての御注文は発売所
フレーベル館にお願いいたします

昭和47年度 現代幼児教育研究会日程

ことしの全国大会は 豊かな民話のくに岡山で!!

● 全国大会

開催地

岡山市 岡山市民会館

日 時

8月1日(火)・2日(水)・3日(木)

● 5月例会

開催地

新潟市 新潟市公会堂

日 時

5月14日(日)

AM 9:30~PM 4:00

● 2月例会

盛会裡に終了

開催地

長崎市 長崎国際文化会館

日 時

2月20日(日)

● 11月例会

開催地

大宮市 大宮市民会館

日 時

11月12日(日)

AM 9:30~PM 4:00

主催 フレーベル館現代幼児教育研究会

いずれ詳しいご案内パンフレットをおとどけいたします。

4月号から キンダーブックが3種類になりました

お子さまの成長にあわせてお選びください

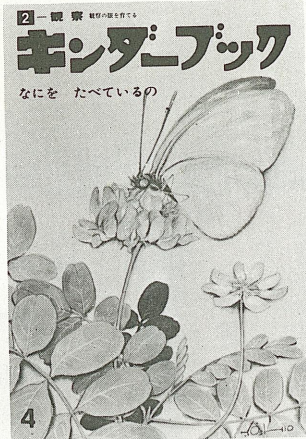
情操をゆたかにし、創造力をのばす

観察の眼をそだて、心情をゆたかにする

科学する心をそだて、自然に親しませる



1-情操 キンダーブック
A4判・20頁・多色刷・付録つばめのおうち・紙工作・4月号特別付録
団体購読価100円

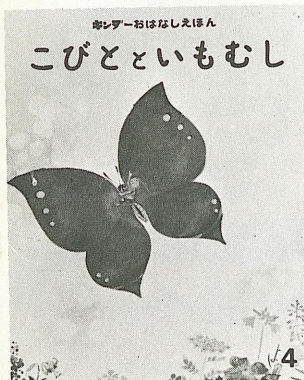


2-観察 キンダーブック
A4判・36頁・多色刷・付録つばめのおうち・紙工作・4月号特別付録
団体購読価130円



3-科学 キンダーブック
A4判・36頁・多色刷・付録つばめのおうち・紙工作・4月号特別付録
団体購読価130円

幼児の心を育てる



キンダーおはなしえほん
L判・36頁・多色刷・付録 つばめのおうち・4月号2大特別付録
団体購読価130円



株式会社
フレール館

園児をもつ母親の専門誌



ホームキンダー
L判・100頁・多色刷・4月号特別付録 団体購読価100円